



ローマ共和政期ラティウム・カンパーニア地方における宗教と政治の研究

毛利, 晶

(Citation)

科研報告書, 13610450

(Issue Date)

2004-06

(Resource Type)

research report

(Version)

Accepted Manuscript

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/K0001509>



研究課題 **ローマ共和政期ラティウム・カンパーニア**

地方における宗教と政治の研究

研究成果報告書

研究課題番号：13610450

平成13～15年度（2001～3年度）

科学研究費補助金 基盤研究（C）（2）

平成16（2004）年6月

研究代表者 **毛利 晶**

（神戸大学・文学部・教授）

交付決定額

| | |
|--------|---------|
| 平成13年度 | 1,900千円 |
| 14年度 | 1,300千円 |
| 15年度 | 800千円 |
| 総計 | 4,000千円 |

研究発表

毛利 晶「古代ローマにおける戦争と宗教」

『軍事史学』第37号（2001年6月）6-29頁

毛利 晶「イマーギネース・マヨールム考」

『西洋史研究』新輯31号（2002年11月）1-27頁

毛利 晶「共和政期ローマのイマーギネース・マヨールム

—その法的権利に関する考察を中心に—

『史学雑誌』第112編第12号（2003年12月）38-61頁

目 次

| | | |
|------|-------------------|----|
| 第1章 | ラーウィーニウムの神域：発掘史 | 1 |
| 第2章 | 南の神域 | 7 |
| 第3章 | 南の神域とラテン人共同体の祭儀 | 40 |
| 第4章 | ローマの国家祭儀と南の神域 | 51 |
| 補遺1 | ラーウィーニウムとアエネーアス伝説 | 64 |
| 補遺2 | votivi anatomici | 71 |
| 参考文献 | | 76 |

第1章 ラーウィーニウムの神域：発掘史

ローマのエウル E. U. R. から国道 148 号線を車で南に 29 キロほど下ると、ポメツィア **Pomezia**(1)の手前で、国道はアルバーノ・ラツィアーレ **Albano Laziale** と海岸のトル・ヴァヤニカ **Tor Vaianica** を結ぶ道と交差する。ここで右(西)に折れてトル・ヴァヤニカ方向に約 3 キロ進み、右手の枝道を更に 600 メートルほど行くと、堅固な壁で囲まれた集落の門の下に至る。中世に起源を持つこの集落(カストルム・パトリカエ **castrum Patricae**)は、現在ではプラティカ・ディ・マーレ **Pratica di Mare** の名で知られている。古代に遡ると、プラティカ・ディ・マーレが建つ丘はラテン人都市ラーウィーニウム **Lavinium** のアクロポリスだった。

ラーウィーニウムは伝説によるとトロヤの英雄アエネーアス **Aeneas** が建設した都市で、ローマ人からは母市として仰がれていたという。ローマの高等政務官は就任に際してこの都市を訪れ、祭儀を行うのが習いだった。前 3 世紀に入るとラーウィーニウムの市民生活は政治的にも経済的にも衰退に転じ、帝政期に市域の内外でウィラが建てられることはあっても、古の活発な市民生活が蘇ることはなかったらしい(2)。近世になって人文主義者たちがこの古典に名高い都市の跡を求めたとき、その遺構はほぼ完全に消滅し、ラーウィーニウムの記憶は地名にも残ってはいなかった(3)。

ラーウィーニウムの本格的な発掘調査は 20 世紀の半ばに始まる。プラティカ・ディ・マーレの南およそ 700 メートルの所に原始キリスト教教会 **S. Maria delle Vigne** (通称 **Madonnella**) の遺構が残るが、1949 年 4 月、その周辺で農作業中に多数のテラコッタ製の奉納品と銘文を刻んだ小さな青銅のプレートが掘り出された(4)。古代の神域(「南の神域」と呼ぶ)(5)の発掘は **F. Castagnoli** と **L. Cozza** によって進められ、57 年の調査で 2 基の祭壇(第 1、第 2 祭壇)が、翌 58 年に更に 11 基の祭壇群が出土する。1959 年には第 8 祭壇の傍で **Castor** と **Pollux** の双子神への奉納を記す銅のプレートが見つかった。1960 年になると、ラーウィーニウムの市壁と想定される場所のすぐ東側でも神域の跡が発見された(「東の神域」と呼ぶ)。

1963年以降ラーウィーニウムの研究調査は、ローマ大学の古代トポグラフィ研究所 *Istituto di Topografia Antica* が中心になって進められている。南の神域からは祭壇群に加えて長方形の建物の遺構（第13祭壇の東側）と霊廟跡（祭壇の東100メートル足らずの所）が出土し(6)、東の神域では、1977年に実施された大規模な発掘調査の結果、多数の奉納品が埋まった窪地や建物跡が見つかった。奉納品は、前3世紀の終わり頃に投棄されたらしい(7)。

ラーウィーニウムの市域とその周辺の発掘は現在も進行中であり、これまでのところ市域の外にある二つの神域の他に、市域内の北東部居住地域、市の中心部、中央浴場跡、市壁の一部、市壁周辺の二つのネクロポリスが調査されている(8)。

ラーウィーニウムには上記二つの神域の他に、更に少なくとも二つの神域が存在したことが知られている。一つは、フォッソ・ディ・プラティカ *Fosso di Pratica* の河口近くにあった神域で、1966, 7年にこの辺りで帝政期のヴィラの一部が発掘されたとき、その下で発見された。神域の遺構は少なくとも前5世紀に遡ると考えられ、建築に使われたテラコッタ、テラコッタの奉納品などの遺物も出土している(9)。Castagnoli は、神域が発見されるとすぐにこれをアエネーアスのイタリア上陸に関する伝説と結び付ける論文を発表し、その中で二つの仮説を提示した(10)。

リーウィウス (1,1,4f.) によると、アエネーアスはイタリア半島のトロヤと呼ばれる場所に上陸した。ハリカルナッソスのディオニューシオス (A.R.I, 55, 2) は、土地の人々がこの場所を太陽神ヘーリオス *Helios (Sol)* の神域と呼んでおり、上陸したアエネーアスが湧き出る水に感謝して神に最初の供儀を行ったという2基の祭壇が今（つまりディオニューシオスの時代）も残ると証言している。この祭壇は、1基は太陽の昇る方角に、もう1基は沈む方角に向けて置かれていた。プリーニウス (n.h. III, 5, 56) が古ラティウム *Latium vetus* について語る中でオスティア *Ostia* から南に下ってオップピドゥム・ラウレントゥム *oppidum Laurentum* の先、ヌミクス川の手前にソル・インディゲスの聖所 *locus Solis Indigetis* があると記す。恐らく、ディオニューシオスとプリーニウスは、同じ神域について伝えているのだろう(11)。さて Castagnoli は、これらの伝承と

新たに発見された神域の遺構から、(a) フォッソ・ディ・プラティカの河口近くで発見された遺跡がまさにこのヘーリオス＝ソル・インディゲスの神域であり、(b) プラティカ・ディ・マーレの北を流れ神域のすぐ南で海に流れ込むフォッソ・ディ・プラティカは、古代のヌミクス川だという仮説を立てたのである(12)。フォッソ・ディ・プラティカをヌミクス川に同定することには異論もあるが(13)、私はこの遺跡を「ヌミクス川河口の神域 (locus Solis Indigetis)」と呼ぶことにする。

ラーウィーニウムの領域で見つかったもう一つの神域は、アルバーノ Albano とプラティカ・ディ・マーレを結ぶ道の真ん中あたり、硫黄の臭いの漂うツォルフォラータ Zolfoforata からは1キロ余りアルバーノ寄りのトル・ティニョーサ Tor Tignosa と呼ばれる地域にある。1947、8年頃、農作業中に神の名を記した三つのキップス（祭壇？礎石？）が見つかり、更に1958年にも同じ場所から、碑文を記したもう一つのキップスが出土した(14)。この場所からは、瓦の破片（前5世紀末から前4世紀初頭、前3世紀、前2世紀の、三つの異なった時期に分類されている）、小皿（前4世紀後半）、陶器の破片（いわゆるエトルスコ・カンパーニア・タイプ。前3世紀から前2世紀）、願ほどきのためのテラコッタの奉納品（女性の像、女性の頭部像など）の破片なども出土しており(15)、ここに建物を備えた古代の神域があったことは間違いない。この辺りは、ウェルギリウス（Aen. VII, 81-91）がファウヌス Faunus の神託が行われたと伝えるアルブネア Albunea の地だったと考えられており、以下この神域を「アルブネア Albunea の神域」と呼ぶことにする(16)。キップスが奉納された年代は、共に出土した遺物およびキップスに刻まれた文字の特色から、前4世紀の終わりから前3世紀の中葉の間に置かれているが、神域自体は少なくとも遺物がカヴァーする期間、つまり前5世紀末から前2世紀まで存続した。

第1章 註

(1) ウォルスキーの都市ポメーティア Pometia は跡形もなく消滅してしまった。ポメーティアは古代都市に因んで名付けられた現代の都市。

(2) Magna Grecia, 93sq. (Castagnoli). 少なくとも紀元後4世紀の初めまで都市の組織が存続していたことは、碑文史料から窺える。

(3) 1972年の時点までのラーウィーニウムの発掘史とトポグラフィー研究

の歴史は、Lavinium I, 15-39 が概略を記している。ラーヌウィウム Lanuvium が中世に Civita Lavinia (Civitas Lanuvina の訛り) と呼ばれたために、ラーウィーニウムの同定は一層の困難を伴った。16世紀になってようやく Pirro Ligorio が碑文 (CIL XIV, 2077) に基づきプラティカ (Patria, Patrica) をラーウィーニウムに同定したが、この知見もその後しばらくはトポグラフィー研究に生かされることがなかった。cf. Lavinium I, 15 sq.; Carcopino (1919) 177sq.

(4) Lavinium I, 36; Lavinium II, 3.

(5) 1900年にプラティカ・ディ・マーレを訪れた R. Lanciani と Th. Ashby によると、この付近にはウィラの跡が見られた。更にドーリア式の柱頭が出土していたことから、彼らは神殿の存在も推測している。Lavinium I, 28 et n. 5 et fig. 33. しかしその後の発掘調査によると、柱頭が出土した場所は古代の浴場跡らしい。cf. Torelli (1984) 162 n. 14.

(6) Lavinium I, 37.

(7) Dury-Moyaers (1981) 153-8; Enea nel Lazio 187-90. 毛利 (1998年 a) 262頁、(1998年 b) 189頁。

(8) 発掘の状況は、Sommella (1969) 18-33; Magna Grecia, 93-99 (Castagnoli); Sommella (1973/4) 33-48; Giuliani e Sommella (1977) 356-72; Castagnoli (1977) 340-55; Castagnoli (1977) 460-76, ante omnia 462-8; Fenelli e Guaitoli (1990) 182-93, Enea nel Lazio, 155-271; Dury-Moyaers (1981) 95-161; Holloway (1994) 128-41 によって追うことができる。

(9) Enea nel Lazio, 167sq.; Torelli, Lavinio e Roma, 12-5; Dury-Moyaers (1981) 143-53. 毛利 (1998年 b) 185~6頁。

(10) Castagnoli (1967) 235-47.

(11) Liou-Gille (1980) 93 et n. 30; 98はこの同定を否定 (cf. etiam Alföldi (1965) 252)。プリーニウスが言う lucus Solis Indigetis は、ヌミクスの近くの霊廟 (cf. Dion. Hal. I, 64, 4sq.) のことだと考える。Liou-Gille が挙げる理由は、これほど近くの場所で、異なった2柱の Indiges に対して二つの異なった祭儀が行われ、しかも二つの神域はどちらも樹の中に立っているというのは、偶然の一致にしてはあまりに出来すぎているということ (cf. p. 98)。しかし私は、Liou-Gille の解釈には同意できない。まず、lucus は校訂された読みで、写本に伝わる読みは locus である。仮に lucus の読みを採るとしても、ディオニューシオスが伝える霊廟の、「周りには樹が一行に植わつた」状態を「杜、森」と言うには無理がある。

Liou-Gille は、プリーニウスがローマの *Sol Indiges* と混同した可能性を示唆するが、ディオニューシオスは、アエネーアスが上陸した場所を住民はヘーリオスの神域と呼ぶ、と証言しており、プリーニウスのソル・インディゲスを「混同」で片づけることはできないだろう。Liou-Gille は、プリーニウスの言う *oppidum Laurentum* をラーウィーニウムと解釈しているが、これは *Vicus Augustanus Laurentium* (第3章「一 ラテン人祭」註(3)) を指すと思われる。

(12) オステアからアンティウムまでの間で、ラティウムの海岸から海に流れ込む川は六つほどある (カナーレ・デッロ・スターニョ *Canale dello Stagno*、フォッソ・ディ・プラティカ、フォッソ・デッラ・クロチェッタ *Fosso della Crocetta*、フォッソ・デッラ・モリーナ *Fosso della Molina*、フォッソ・デル・インカストロ *Fosso dell'Incastro*、リオ・トルト *Rio Torto*)。多くの研究者は、これらのうちリオ・トルトをヌミクスに同定する説を支持してきた。cf. Tilly (1936) 1-11.

Tilly の論拠は、ウェルギリウスが『アエネーイス』の中でヌミクス川と呼ぶ川をティベリス川の南二キロばかりのカナーレ・デッロ・スタンニョに同定する J. Carcopino の説 (Carcopino (1919) 480-9) を批判し、ヌミクスはラーウィーニウムとアルデアの国境を流れていたことを論証することによって、これをリオ・トルトに同定する説を補強することに主眼があり、ヌミクスを他の4つの川のいずれかに同定する説に対する批判は、副次的な位置しか与えられていない。ヌミクスはラーウィーニウムとアルデアの国境を流れていたと Tilly が考える根拠は、アエネーアスのもとに身を寄せたアンナ Anna がラーウィーニアの怒りを恐れて逃亡し、ヌミクス川に身を投げてニンプとなった伝説 (Sil. Ital. VIII, 179-81; 194-6) とヌミクスに岸でアエネーアスとメゼンティウス Mezentius が戦った伝説 (Dion. Hal. I, 64, 4; Origo 14, 4; Servius, ad Aen. IV, 620; Liv. I, 1)、それに、かなりの部分が欠損した碑文 (CIL XIV, 2065 = ILS 6181) の三つだが (Tilly (1936) 7-9)、これらは決定的な論拠ではない。碑文の *NVMICE LAVINAS* は、Tilly も認めるようにフォッソ・ディ・プラティカを指すようにも考えられるし、メゼンティウスも、ラーウィーニウムとアルデアの国境で戦略上重要な地点を占拠した (Tilly (1936) 8) とも、北からラーウィーニウムに攻め込もうとしたとも解釈できるからである。Castagnoli が新たに河口近くで発見された神域を根拠にフォッソ・ディ・プラティカをヌミクスと同定すると、この説はイタリアの学界を中心として多くの研究者に受け入れられた。

(13) 例えば Palmer (1974) 121 は、依然としてリオ・トルトをヌミクスと考えて

いる。

(14) これらのキッポスは、現在ローマの国立博物館 Museo Nazionale Romano alle Terme di Diocleziano に展示されている cf. R. Friggeri, *La collezione epigrafica del Museo Nazionale Romano alle Terme di Diocleziano*, 2001 Milano, 36. キッパスに刻まれた銘文に関しては、毛利 (1998b) 182～4頁を参照。

(15) Dury-Moyaers (1981) 232-46.

(16) アルブネアがティーブールのシビュッラとも伝えられることから (Isidor. Etym. 8, 8; Lact. Divinae Inst. I, 6, 7-17)、研究者の中にはファウヌスが訪れた託宣所はティーブール Tibur だと考える人もいる (RE I, 1 s. v. Albunea (Wissowa) cf. Serv. Aen. VII, 82: *alta quia est in Tiburtinis altissimis montibus*)。しかし、ファウヌスが訪れたアルブネアをラウレンテースの杜と伝える史料があり (Prob. Georg. I, 10: *oraculum eius (= Fauni) in Albunea Laurentinorum silva est*)、トル・ティニョーサで出土したキッパスが伝える神の名 (Parca Maurtia、Neuna、Neuna Fata) は、ここで人の運命についての託宣が行われていたことを窺わせる。cf. Palmer (1974) 81. Palmer は、ウェルギリウスの “*alta ...Albunea*” を、高い樹で覆われた杜と解釈する。

第2章 南の神域

これまでの発掘で見つかっている南の神域の主な遺跡・遺構は、祭壇、家、
霊廟の三つで(1)、その他に多数の奉納品および銘文を刻んだ2枚の青銅のプレートが出土している。

1. 祭壇と建物跡

a. 祭壇

13基の祭壇は北から南へ一列に、すべて東の方角に向けて置かれている。但し、これらの祭壇は同時期一斉に奉納されたものではなく、また13基すべてが同時に使われたこともない。現在知られる限り最古の段階に属するのは最も北側の第13祭壇、第8祭壇の下の祭壇(1)、それに第9祭壇の下で残骸が見つかった祭壇(2)の3基で、これらは間隔を置いてそれぞれの台座の上に据えられた。これらの祭壇が属する地層からは、前6世紀前半のギリシア製の陶器（アッティカ産黒絵付けディーノス）が出土している(3)。

次いで前5世紀の半ばまでの間に、第8祭壇の南側に5基の祭壇（第1～第5）が置かれて、祭壇の数は合計八つとなった(4)。第1から第4までの4基は、様式に違いはあるものの台座の部分で繋がっている。第5は第8からも4基の祭壇群からも離れ、両者の間に据えられた。その後、前4世紀末までに更に2基の祭壇（第6、第7）が加えられる。その際、第5の台座が第8と第4の台座まで左右に延長されて、新たな2基の祭壇は第5と第8の間に据えられた。祭壇群が最終的な姿を取るのは前4世紀末のこと。第9は一旦破壊され、第8の北に長い台座を築いた上で第9を含む4基の祭壇（第9～第12）が置かれた。この時、第13は埋められたらしい。第1、第2、第8は、前3世紀にも修復されているが、これは全体の構成を変えるものではない。祭壇が発見されたとき、破壊された祭壇の破片や瓦、奉納品などが上に堆積して層をなしていた。この層には前2世紀より後に属する物は含まれないので、祭壇の使用は前3世紀の末か前2世紀の前半には終わったと考えられる(5)。

祭壇の様式に関する研究は F. Castagnoli によって始められた(6)。Castagnoli は、これらの祭壇の俯瞰図がギリシアの祭壇に特徴的な形（Π形とT形。但しT形を取るのは第5祭壇のみ）をしており、しかもすべて東に向けて置かれて

いること(7)、また多くの祭壇を並べて配置するのもギリシア世界に例があることから(8)、ギリシアの影響を推測した。しかし他方で、ラーウィーニウムの祭壇の立面はギリシアの祭壇と異なり二つのエキヌスを交差配列で重ね合わせた形をしている。ギリシアの祭壇のプロフィールはコーニスと台を結ぶ縦の線であるのに対し、ラーウィーニウムの祭壇の立面は縦の線が無く、肥大化したコーニスと台で構成されているのである。同様のタイプは、ローマおよびローマ以南の都市から広く出土している奉納用の小祭壇 (arula) にも見られる(9)。Castagnoli は、二つのエキヌスを交差配列で重ね合わせた祭壇の起源に関して、これをイオニアの祭壇に由来させたりミケーネ世界からエトルリアを介しての伝播を考える先行研究を批判し、これらの祭壇の刳形はミケーネ或いはギリシアの先例に倣ったものではなく、動的な形と直接のコントラストを好むイタリキーの嗜好に合わせて作られたものだ、と主張している(10)。

b. 建物跡

第13祭壇の北東数メートルのところに建つ建物は、神域で営まれる祭儀と直接の関係はなかったかもしれないが(1)、神域の一部だったことは間違いない。この建物が建てられたのは前6世紀の半ばのことで(2)、その後、火災による破壊、再建と増築を経て前5世紀の半ばに取り壊された。建物が取り壊されたのは当時祭壇の数が三つから八つに増やされたことと関係があり、スペースの確保が理由だったらしい(3)。

建物は最初、長方形の部屋 (I) と南東部に付随した小部屋 (II)、それに部屋 (I) の南面と西面のポルティコ (III) からできていた。小部屋 (II) が煮炊きに使われたのは、ほぼ確かである。部屋 (I) はポルティコ (III) のある南と西の面、つまり祭壇の方向に向かって開かれ、他の面は壁で覆われていた。北側の壁に沿って運河が掘られており、これが神域の境界だったのかもしれない(4)。焼失後の再建は元のプランに従って行われたが、同時に北側と東側の壁に沿って五つの部屋 (IV~VIII) が増築された(5)。部屋 IV、VI、VII は外からしか入れず、しかも極端な矩形をしているので、これらは建物の南側の竈 (大小二つ) で焼いた陶器、あるいはテラコッタ製品を保管する倉庫として使われたと推測しうる(6)。

2. 碑文

南の神域からは、これまで知られているだけでも13基の祭壇と霊廟（後述）、それに多数の奉納品が出土しており、これが複合的な性格を持った神域だったことを推測させる。中でも銘文を刻んだ2枚の金属プレートは、この神域で祀られていた神を同定する上で貴重な史料である。2枚のプレートのうち1枚は1949年に多数のテラコッタ製の奉納品に混じって発見され、2枚目は1959年になって第8祭壇のそばで見つかった。先に見つかった碑文は CERERE という文字を含み（以下「ケレース碑文」と呼ぶ）、後の碑文は双子神 Castor と Pollux への奉納を記している（便宜上「ディオスクーロイ碑文」と呼んでおく）。

a. ケレース碑文

青銅のプレートは横29.2センチ、幅5.2センチで、3ミリから4ミリの厚さがある。両端に一つづつ穴があり、何かの表面に釘で打ち付けられた(1)。碑文を初めて紹介した M. Guarducci は、一緒に出土した奉納品 (ex voto) の様式的特徴と、碑文の文字の特徴及び言語学的特徴から、その年代を前3世紀に置いた(2)。

僅か四つの単語から成る碑文の読みに困難はない。

CERERE · AVLIQVOQVIBVS

VESPERNAM · PORO

問題はこれらの語の語形と意味の解釈で、この点に関しては研究者の間で意見が大きく分かれて、今日に至っている。まず、初めて碑文を紹介した Guarducci の解釈を簡単にまとめておこう。

- i) CERERE(M)と VESPERNAM は共に対格。AVLIQVOQVIBVS と PORO は共に奪格。「用意する」「饗する」といった意味の動詞が省略されている。
- ii) 碑文は宗教的な掟（神域で祀られた神にそなえる食物を定める）を記し、プレートは贅を置く台に取り付けられていた。
- iii) 碑文の上段は昼の食事（正餐）、下段は夕べの食事を定める。
- iv) ceres は、cena の意味で使われている(3)。
- v) auliquoquia は aula (olla)と coquere の語根から作られた形容詞で、「鍋で煮ら

れた」という意味。ここでは、これが名詞化されて「煮た食べ物」を意味している。

vi) *porus* は *porrus* (*porrum*)、つまりニラネギ。

最後に *Guarducci* は、供する食べ物からこの神域で祀られていた神を特定することはできないが、一緒に見つかった奉納品 (*ex-voto*) から土地の豊饒と人間及び動物の健康を司る神であろうと推測し、アンナ・ペレンナ *Anna Perenna* の可能性を指摘している(4)。

Guarducci がこの論攷を発表したとき、神域の本格的な発掘はまだ行われておらず、彼女の研究は遺跡の状況に関して不十分な認識を基礎に置かざるをえなかった。銘文を刻んだプレートは多数のテラコッタ製奉納品に混じって発見されたが、それらは前2世紀になって祭壇の使用が終わったあと投棄されたことが、現在では分かっている。従って、銘文の年代やプレートが取り付けられていた場所、そして供犠を受ける神の性格などを推測する上で、プレートが見つかった場所や一緒に出土した奉納品を論拠に据えることは出来ない。ただ銘文の年代に関しては、今日ではむしろ銘文の字体と語形に見られる特徴を根拠として、*Guarducci* の推測が受け入れられている。

銘文を構成する四つの単語のうち、解釈が定まっているのは *auliquoquibus* だけで、これは *auliquoquia* = *aulicocia* (*exta*) 「鍋で煮た犠牲獣の内臓」(*Paul. (Fest.) 22L cf. CIL VI, 2065 = ILS 5034: exta aulicocta; Varro, L.L. V, 104: exta ollicoqua*) の奪格であることに研究者の間で異論はない(5)。そこで以下、他の三つについて、解釈の試みを概観しておこう。

Guarducci がケレース碑文を公表した翌年には、*St. Weinstock* が短い論攷を *Journal of Roman Studies* に発表し、*Guarducci* の解釈を批判した。*Weinstock* の批判の出発点は、*CERERE* の解釈に際して詩で用いられる換喩が宗教上の掟 (*lex sacra*) の言葉遣いに影響を与えた可能性を否定することにあるが(6)、確かにこの批判は正しく、*CERERE* は神の名(ケレース)と理解すべきだと思われる(7)。

Weinstock は2行書きの銘文を *Guarducci* のように対句と理解するので、

CERERE(M)が神の名である以上、VESPERNAM も神の名ということになる(8)。Weinstockによると、vesperna という言葉には二つの意味があった。一つは碑文に現れるウェスペルナで、これはラーウィーニウムのケレースの神殿に合祀されていた女神。他方、同じ綴りの普通名詞は食事を意味する(9)。これらの解釈に対し、ローマにケレース・リーベル・リーベラの祭儀が導入された経緯を伝える伝承を再検討するため、考察の手掛かりをケレース碑文に求めた R. Bloch は、碑文の2行が対句を構成するという捉え方そのものを否定する。その理由は、先ず、碑文に贅を受ける神の名が記されていないのは奇妙だし、また神の名の換喩的な用法もこの時代の碑文にはありそうにないので、CERERE は神の名に理解すべきだが、他方で vesperna = repas の意味はフェストゥス (パウルス) から知られており (註(8))、しかも碑文の文脈にも合致するのに、これを差し置いて新しい神 (つまり、史料的な裏付けが他にない神) を作り出すのは方法論上の誤りだ、と考えるからである。2行を対句でなく一つの文章と考えれば、CERERE は神の名の与格と捉えることが可能になる(10)。しかし Bloch の理解だと、新たな問題も生じる。つまりこの解釈に従うと、同じ贅である auliquoquia と por(r)us の奪格が並列の接続詞なしに離れて置かれていることになる。アシュンデトンによって繋がれる言葉は並べて置かれるのが通例で(11)、Bloch もこの点を気にしてか、韻律上の理由や昼食と夕食を区別した可能性 (但し、昼食の語はない)、更には「ケレースには、一般的規則として鍋で煮た内臓を贅として捧げ、ニラネギからなる夕食を供した」という解釈を試みているが、苦し紛れの説明との印象を拭いきれない(12)。

報告に続く討論(13)で J. Marouzeau は、碑文が2行に分かたれている以上二つのフレーズから成ると考えるべきであり、二つの単語の間に打たれた点は二つの単語相互の結びつきを示すこともあると述べて、対句の表現であることを匂わせているが、J. Vendryès は2行全体で一つのフレーズと解釈することに賛成している。結局、研究者が碑文を読んで受けた印象が問題なのだろう。Vendryès は更に、por(r)o を「これ以降」という意味の副詞と解釈する提案をしている。

Le Bonniec は、ローマのケレース祭儀に関するモノグラフの補遺でラーウィーニウムのケレース碑文について論じ、PORO 以外の三つの単語の解釈については Bloch 説を受け入れている(14)。問題は PORO で、Le Bonniec は porgo

(porrigo) という動詞の可能性 (テーブルが主語) を一応は考えるが、そうすると碑文を刻んだ人のミスという恣意的な説明をせざるをえなくなると言って結局はこれも否定し、Vendryès の提案に、これまで試みられてきた解釈のなかで唯一の可能性を見ている(15)

言語学的な視点からケレース碑文に対して考察を加えた E. Peruzzi は、Guarducci と同様にラーウィーニウムでは昼食と夕食が、それぞれ *ceres* と *vesperna* と呼ばれたとし、*vesperna* の語源に関しては、*vesper* (夕べ) に時を表す接尾語-no-が付いて出来た形容詞**vespernus* を想定した上で、その女性形が名詞化したと説明している(16)。他方、後にラテン語で夕食(正餐)を意味することになる *cena* は、女神の名 *Ceres* に同じ接尾語-no-が付いた**ceres-na* から、**cersna*、**cesna* を経て出来上がったが、ウェスペルナが日没前に住居で取られたのに対し、**ceresna* は野で農作業中に取られ、元来は正確な時間が決まっていなかった。夕食の時、食事の一部を家の神々にお供えしたように、昼の食事の時も野の神、特にケレースやテッルスに食事の一部が供えられ、「ケレースにお供えする時の食事」という名称もここに由来する。以上が Peruzzi の主張の概要だが、ケレース碑文の CERERE を女神ケレスの名が換喩的に用いられたと説明する点を捉えて Guarducci を批判し、最古のローマの宗教には自然現象や自然の力を人格神として把握する観念はなく、この場合も昼食を意味する言葉が後に人格化され神の名となった可能性の方が高いと主張しながら(17)、自らは *cena* の語源的解釈において神の名から出発するのは不可解である。いずれにせよ、碑文の CERERE はケレース神を指すと考えられ、もし Peruzzi が議論の前提とするように2行が対句を構成しているとすれば VESPERNAM も神の名と捉えざるを得ないので、Peruzzi の考察はケレース碑文を理解する上であまり役に立たない。

既に述べたように南の神域で本格的な発掘が始まるのは1957年のことで、この年と翌58年の調査で13基の祭壇が出土し、更に59年には第8祭壇の近くでカストールとポッルークスへの奉納碑文が見つかった。Guarducci はこうした研究の進展を受けて、南の神域では様々な神々が祀られていたので、供儀を定める碑文には対象となる神が明記されていたはずだ、と考えるようになる。彼女は1959年の論攷において、銘文の構文については前の解釈(二つの対

格と二つの奪格から成る対句的表現)を維持するものの、対格で表された二つの名詞については、これらを神の名とする Weinstock 説を支持している。しかし Guarducci は、Weinstock のように女神 Vesperna と普通名詞の vesperna に共通する語幹として動詞 vescor に含まれる語幹を想定し、Vesperna を食物の女神と解釈するのではなく、vesperna も Vesperna も共に vesper (夕べ) から作られた名詞と考える(18)。Guarducci によると、vesper には(a)宵の明星、(b)夕方、(c)西方の意味があるが、ケレースと宵の明星の間には如何なる関係も認められないので、ケレースと同じテーブルで贅を受け取るウェスペルナは、夕方或いは西方(両者は、古代人の観念の中で互いに結合していた)の女神だったにちがいない(19)。日の沈む西方の地帯は、古代人のイメージでは死者の国であり、従ってウェスペルナは死の女神でもあった。この論攷では、Guarducci は西方を死者の国と同一視するギリシア人の考え方が(形は変えられたかもしれないが)ラテン人のもとに伝えられたと推測し、ラーウィーニウムのウェスペルナにもギリシアの要素を見ようとしている(20)。しかし1976年に上梓された J. Heurgon への献呈論文集では、Guarducci は J. Heurgon が提示した仮説(21)にヒントを得てウェスペルナに対するこの理解を変え、これを西方の土地(つまりイタリア)を擬人化した神と考えるに至った。都市や地域を擬人化する習慣は共和政期のローマ人にはなかったが(唯一の例外はローマ)、ギリシア人、特にヘレニズム期のギリシア人はこうした擬人化を盛んに行い、そのうちのあるものは祭儀の対象となった。アエネーアス伝説の伝播に伴い(そして恐らくは知識人の想像力の助けも得て)、このヘスペリアがラーウィーニウムの神域にもたらされ、そこでラテン語の名(ウェスペルナ)を得た、というのである(22)。

1959年に *Studi e Materiali di Storia delle Religioni* に掲載された Castagnoli の論攷はディオスクーロイ碑文を考察の対象とするが、最後にこの南の神域で営まれていた祭儀の多様性を指摘する中で、ケレース碑文にも言及している。Castagnoli は研究者がそれまでに試みてきた解釈を極めて簡潔に紹介するにすぎないが、一点 PORO に関して、これを前置詞 por (= pro) と捉え VESPERNAM に掛ける仮説は新しい(23)。ただ Castagnoli 自身が非常に慎重な言い回しをしており (Sarebbe forse il caso di considerare ...)、あくまで一つの可能性として考え得るということではかない。

Le Bonniec は、PORO に彫り間違いを想定するのは恣意的な説明として斥けたが、K. Latte は 1960 年に上梓した『ローマ宗教史』の中で、逆に、PORO を POR<RICIT>O に修正すべきだと主張している(24)。Latte によるとこの碑文は、一日の仕事を終えた夕方にケレースに対して供する贄 (daps) について定めていた。

ところで CERERE を神の名の与格に理解する Bloch の解釈は、H. Wagenvoort に支持を見いだしている。Wagenvoort は古典の用例を基に、AULIQUOQUIBUS のあとには facito を補う(25)。しかしそうすると UESPERNAM が文法的に理解しにくい。そこで 2 行目を別の文章と考えて、PORO を POPLO に変えた上で動詞 dato を補うことを提案する(26)。つまりこの掟は、ケレースに鍋で煮た犠牲獣の内臓を供えたあと、人々に夕べの食事を供するよう命じていた、と解釈するのである。かつて G. Wissowa は、犠牲獣の肉を供犠に参加しなかった人民に振る舞う（或いは、売却して代金を神殿の収入とする）のは、ローマ古来の宗教の外にあった祭儀にのみ見られる現象だと指摘したが(27)、Wagenvoort はこれを受けて、前 3 世紀のラーウィーニウムではケレースへの祭儀はギリシア風に (ritus Graecus) 行われていた、と結論づけている(28)。

Latte も Wagenvoort も PORO を誤記と考えて修正を試みるが、碑文学者である Guarducci はこうしたやり方を「テキストに対する暴力 (violenza)」とか「虐げる (si maltratta)」といった表現で批判している(29)。特にケレース碑文のように入念に文字が刻まれた碑文に対し、研究者の側の都合でテキストに変更を加えることは慎むべきだ、というのである。これは碑文や写本を扱う際の一つの基本的なスタンスであり、私もこの立場を支持したく思う。

G. Pugliese Carratelli は、前 4 世紀以前のラティウムおよびローマとマグナ・グラエキアとの関係を論じた 1968 年発表の論文の中で、南の神域の 13 祭壇が置かれた地域を、「神々のアゴラで、ラティウムの大きな神域に中に楔のように食い込んだギリシア祭儀のエリア」と呼び、こうした認識の上に立ってケレース碑文を解釈している。Pugliese Carratelli は、ギリシアの祭壇の「犠牲の肉をここで食するように」という銘を参考に、プレートは祭壇に取り付けられたもので、碑文は「ケレースのために、煮た内臓で (供犠のための) 夕方の

食事をこの前で（作れ）（con visceri bollite <fa> il pasto (sacrificale) della sera qui innanzi）」と命じていたと考える(30)。しかし Guarducci も指摘するように、プレートは祭壇に取り付けられていたのではないし、PORO を qui innanzi の意味の副詞に理解することにも無理があるだろう(31)。

『ローマ世界の興亡 (ANRW)』の第1部第2巻（1972年）で R. Schilling は1950年以降20年の間に行われた共和政期のローマの宗教に関する研究を回顧し、その中でケレース碑文にも言及している。彼は諸説を簡単に紹介したあと、当面の解釈と断った上で、「ケレースに、夕べの供物として、鍋の中で煮た内臓を捧げよ（présente à Cérés, en offrande du soir, une fressure bouillie dans la marmite）」という碑文の訳を付す(32)。

1975年に出版されたラーウィーニウムの発掘報告の第2巻『ラーウィーニウム 13祭壇』で、Castagnoli はケレース碑文の問題点と解釈を以下のように纏めている(33)。

- i) CERERE 与格、或いは対格。普通名詞（昼食）、或いは神の名。
 - ii) auliquoquibus 「鍋で煮た（犠牲獣の内臓）」
 - iii) VESPERNAM 晚餐、或いは夕べの供物、或いは神の名。
 - iv) PORO porrus の奪格、或いは puer の与格、或いは por の属格、或いは副詞、或いは前置詞、或いは誤記（porgo、porricito、poplo）。
- なお、碑文が供犠に関する掟を記していることは、すべての研究者が一致して認めている。

次に、これまで研究史を追う中で得られた結果を纏めておこう。

VESPERNAM が対格であることに疑問の余地はないので、CERERE の格をどう考えるかは、2行を対句的表現として理解するか否かに掛かっている。CERERE を普通名詞と理解する説は、これを提案した Guarducci が後の論攷で放棄しており考慮の対象から外してよいだろう。つまり、CERERE については、神の名（ケレース）が対格と与格のどちらの格で用いられているかが未決の問題として残っている(34)。

逆に VESPERNAM で問題なのは、この対格を取る名詞が神の名か普通名詞

かという点である。二つの行を対句と理解すれば神の名に違いない。この解釈で疑問視されるのは、*Vesperna* という名の神が他に伝わらないこと。ただ、私たちはギリシア人やローマ人が祀っていた神をすべて知っているわけではないという *Guarducci* の指摘は(35)、単純ではあるが真実を突く。もし全体が一つの文章で構成されているのであれば、*VESPERNAM* は普通名詞（そして、*CERERE* は与格）と考えざるをえないだろう。プラウトゥスが *vesperna* を晚餐の意味で使っていたことは、古代学者の証言がある（註(8)を参照）。

最後に *PORO* について。写本や碑文には誤記・脱落の可能性が常にある。しかし恣意的な解釈に流されないためにも、現存するテキストは出来る限り尊重し、変更は他に理解できない場合に限るべきだとの立場を私は取る。語形と語順を勘案すれば、*PORO* は *porrus* (*porrum*) の奪格とするのが、最も無理がない解釈だろう(36)。だとすれば、これは一行目の *AVLIQVOQVIBVS* に対応する同格の名詞ということになるが、この二つがアシュンデトンの関係にあると考えがたいので、1行目と2行目は対句を構成する二つの文章と理解するのが最善の解釈である。つまり、*VESPERNAM* は *CERERE* に対応する神の名前という *Weinstock* が最初に提示した解釈に私も従いたい。

1976年までの研究史を辿ることによって、ケレース碑文のテキスト解釈については一応の結論を得ることができた(37)。しかし実のところ、ケレース碑文は南の神域で祀られていた神々に関して、その一端を伝えるにすぎない。次に私たちは、13祭壇エリアで出土したもう一つの碑文に注目して、この問題を考えてみたい。

b. カストール碑文

1959年に第8祭壇のそばで、双子神カストール *Castor* とポルクス *Pollux* への奉納を記した青銅のプレートが見つかった(1)。プレートが出土した地層は、第8祭壇が改修された際に土を盛って踏み固めたもので、プレートが本来あった場所は不明。プレートに刻まれた銘文は双子神カストールとポルクスの名を与格で記し、プレートの4隅と真ん中の5箇所に釘穴があるので、奉納品から剥がれたことは容易に想像しうる。五つの釘がついたままの凝灰岩のブロック（祭壇の一部でないことはほぼ確かで、恐らく奉納品の台座だった

と考えられる) が近くで見つがっているが、ブロックの釘の位置とプレートの穴の位置は一致しない(2)。

銘文は2行に亘り、2行とも右端から左の方向に刻まれている(但し、1行目の終わりはブーストロフェードン *boustrophedon* のように下に折れ曲る)。銘文は古ラテン語の文字で刻まれ、字形の特徴から、ティヴォリのキップスのブーストロフェードンで刻まれた銘文(CIL I¹, 2658)(前6/5世紀)とフォロ・ローマーノのラピス・ニゲル(共和政の最初期)の間に置くことが可能である(3)。

CASTOREI PODLOVQVEIQVE
QVROIS

Castagnoli はプレートが出土した1959年に研究誌でこの碑文を紹介し、語形の解釈と新史料のローマ宗教史における位置づけを試みたが、Castagnoli の報告の直後からこの碑文はケレース碑文と同様に広く研究者の関心を集め、語形上の問題や史料的解釈に関して様々な仮説が提示されてきた。そのうち1972までの研究は、1975年に出版された13祭壇の発掘報告の中でCastagnoli の手で簡単に纏められている。Castagnoli はこの報告で、これらの研究を受けて先に提示した解釈を一部修正しており、また銘文の語形に関する解釈は75年の時点でほぼ尽くされていると考えられるので、私は以下でCastagnoli の二つの論攷を比較し、その間に著された他の研究者の研究を参照することによって、この銘文の問題点を語形を中心に整理し、現時点で最も妥当と思われる解釈を確定したい。

碑文は三つの名詞(CASTOREI、PODLOVQVEI、QVROIS)と一つの接続辞(QVE)から成る。CASTOREI はCastorの与格。次の単語にも現れる名詞の語尾-ei は古ラテン語に一般的な単数与格の語尾であり問題はない。-QVE はラテン語のコプラで、それ本来の働きをしている(4)。次に、解釈の分かれる二つの単語について検討しよう。

PODLOVQVEI

双子神ディオスクーロイの一人 Πολυδεύκηςは、ラテン語ではPolluces (Pollux)

と呼ばれる。前者が後者に変化する過程で存在したはずの語形に関して、従来から様々な仮説が提示されてきたがどれも決定的なものではなかった。カストール碑文はこの中間段階の語形を伝えている可能性があり、そうした意味からも重要である(5)。しかしギリシア語の Πολυδεύκης と比較して、カストール碑文の Podlouquei は最初の u 音が脱落し、d 音と l 音の位置が転換し、更に eu 音が ou 音へ変化しており、その説明が求められることになる。1959年の段階で Castagnoli が提示した説明は、u の脱落についてはラテン語における語頭のストレス・アクセントの影響を想定し、-l(u)d-の-d(u)l-への変化は音位転換 *metatesi* と理解するものだった。更に二重母音 eu の ou 音（長い u 音）への変化については、Castagnoli は *Volksetymologie* の影響を考えている。カストール碑文が出土する以前から言語学者の中には、Πολυδεύκης の Polluces への変化が *polluceo*（犠牲として捧げる）または *luceo*（光る、輝く）、*lux*（光）からの連想が働いて起こったのではないかと想像する人がいたが、Castagnoli によると、カストール碑文により *luceo* の語根 (*louk-*) との交差の可能性が高くなった。ディオスクロイに本質的な光のイメージが、名前に含まれるようになったと考えるのである。最後に書き方の問題として、-k(e)- (-c(e)-) と書かれるべきところが -qu(e)- となっているが、Castagnoli は後に続く接続辞 -que の影響下に起こった誤記を考えている(6)。

次に1975年の報告を見ると、先ず綴りについてはケレース碑文の *auliquoquibus* を引いて、-qu(e)-を-que の影響下に起こった誤記する解釈を放棄している(7)。しかし同じケレース碑文でも、ケレースは CERERE という風に k(e) 音が c(e) で記されており、c(e)-と qu(e)-の間に意識的な使い分けが働いていたと考えた方がよいのではないか。G. Radke は、ラーウィーニウムではローカルな発音上の現象として、軟口蓋音の後に軟口蓋唇音（ラビオ・ウェラーレ）が続くとき、後の軟口蓋唇音が前の軟口蓋音に遡及的に作用してこれを唇音化することがあり（つまり、接尾辞-que が付いたために、その前の-c(ei)が唇音化して、-qu(ei)と発音された）、カストール碑文を彫った職人は実際の発音を忠実に再現したと考えている(8)。Castagnoli はこの説明を無視しているが、私には説得力のある仮説のように思える。

最初の u 音の脱落については、Castagnoli は先の説明を繰り返しているが、

Radke はアクセントの前の音節で起こる語中音消失 *Synkope* として説明する(9)。つまりギリシア語 Πολυδεύκης のおけるアクセントが、ラテン語に借用された時にも維持されていた（換言すれば、第二音節の *Synkope* はいわゆる語頭アクセントの始まる以前に起こった）と考えるのである(10)。

ギリシア語の -λ(u)δ- が碑文では -dl- と綴られていることに関して Weinstock は、これが音位転換であることを立証する類似の例が他に見つからないので、誤記を考えたが(11)、Castagnoli はこれが最もシンプルな説明であることを認めつつも、-ld- の -dl- への変化のみならず、-eu- の -ou- への変化と -qu- の出現をも説明できる仮説として、先の論攷で示した *Volksetymologie* に原因を求める仮説を繰り返している(12)。

-dl- を誤記と考える研究者は、誤りが生じた原因としてギリシア語で書かれた手本の読み間違いや(13)、正確さを求めすぎたが為の誤り(14)を想像している。しかし第2音節の *Synkope* や -quei- は、この銘文が当時の発音を正確に再現していることを窺わせ、これらの推測には説得力がない(15)。

それでは、何故に -ld- から -dl- への音位転換が起こったのか。Radke は純粋に言語学的な観点からこの現象を説明する。彼は、この音位転換が第2音節に *synkope* が起こる以前に起こったとは考えがたいとして、先ず *Poduloukes という形を想定する。この形は実際には伝わっていないのだが、Radke はエトルリア語の *Pulutuke* から存在が実証されたも同然だと考えている。次に *Poduloukes が音位転換を起こして *Poludoukes となった。この音位転換は第2音節の u 音の影響を受けて起こったもので、バラレルな現象として現代イタリア語の *padule* (ラテン語の *palus*, *paludis* より) を挙げることができる。つまり Radke は、Polydeukes > *Poludoukes > *Poduloukes > Podloukes > *Polloukes > Poloukes の変化を想定するのである(16)。

Radke は、-eu- > -ou- の変化についてはイタリキ系言語の母音交換 *Ablaut* と呼ぶ以上の説明はしていない(17)。ただ Leumann によると、ラテン語において古い二重母音 *eu* の *e* が後に続く *u* の影響を受けて唇音化し、唇を丸めて発音する *o* に変わる音韻変化 (*eu* > *ou*) は確かにあったが、Πολυδεύκης がこの音韻変化

が起こる以前にラテン語に借用されたのかは不明である。Leumann は、イタリア語の固有名詞をギリシア語で表記する場合、ギリシア語は二重母音 ou を欠くので ou を eu と表記することに注意を促し、逆のことが Πολυδεύκης の借用に際しても起こったのではないかと考えている(18)。

私は歴史家として、言語学の領域にあまりに深く立ち入り過ぎたかもしれない。いずれにせよ、音韻論上の法則に基づく変化と、Castagnoli が重視するような言葉を使う人々の意識とは、どちらを採り、どちらを捨てるべきかといった関係にはないように思われる。Polydeukes という音の響きを聞いたラテン人たちが、この神の本質に通ずる louk- (光) を連想した可能性は十分あるだろう。そして -lydeukes から -duloukes への変化は、それがラテン語に固有の音韻変化の法則と衝突しなかったためにスムーズに進んだのではないかなにも Radke のように *Poludoukes の段階を想定しなくとも、Polydeukes から人々の連想を介して *Poduloukes に進み得たように思われる。ただその後の変化は Radke が再構成したとおりで、エトルーリア語の Pultuke (Pultuke) を *Poduloukes に遡らせる仮説も説得力がある。

QVROIS

Castagnoli は、1959年の論攷において QVROIS をギリシア語 κούροις のラテン文字での転記としている(但し、語尾についてはラテン語の可能性を残す)。カストールとポリュデウケースは、ギリシアではディオスクーロイ(ゼウスの息子たち)と呼び慣わされているのに、この碑文でクーロイと呼ばれている。このことに関しては、ローマの宗教は神々の系譜にほとんど関心を持たなかったため、双子神の祭儀がラーウィーニウムにもたらされたときにディオスの部分が落とされた可能性と、ギリシアの祭儀で既にクーロイという単純な呼び名が使われていた可能性の二つを想定した上で、Castagnoli 自身は後の説明を採る。κούροι はホメーロスで若い高貴な戦士たち(κούροι Ἀχαιῶν etc.)を指し、特にディオスクーロイ祭儀の中心であるスパルタでは、この言葉(κῶροι)は騎士層を意味したからである(19)。これらの解釈は、語尾がラテン語の与格のアーケイックな形であることをより強く主張するようになった点を除けば、1975年の報告書でも基本的に変わっていない(20)。

QVROIS はギリシア語をラテン文字に転記したのか、それともギリシア語からの借用語で、-ois は古ラテン語の語尾か(21)?。PODLOVQVEIQVE の-que は明らかにラテン語の接続辞なので、QVROIS もラテン語化して使われている可能性が高いように思われる。いずれにせよ、この銘文を読んだラテン人たちは、これをギリシア語から借用されたとはいえ、ラテン語の単語と感じたのではないだろうか?

QVROIS の語幹の部分 *qur-*が、もし *koup-*の転記だとすればイオニア方言に由来すると考えられるが(22)、*κwp-*の転記ならドーリア方言だろう(23)。イオニア系方言からの転記・借用を考える Castagnoli は、ラーウィーニウムのディオスクーロイの起源を南イタリアのイオニア系のギリシア植民市(クーマエ)に求め、Heurgon はロクリスからレギオンを中継して(或いはヒッポニオンかメドマ Medma から)ラーウィーニウムに伝えられたと推測している(24)。他方、*quroi* をドーリス方言に遡らせる Pugliese Carratelli によると、タレントウムが有力な候補である(25)。いずれにせよこの碑文は、前6世紀から5世紀にかけて、ラティウムとマグナ・グラエキアの間に従来考えられてきた以上に密接な交渉があったことを窺わせる。

ローマでは、前484年にフォルムのカストーレス神殿が献堂された。Castagnoli は、ラーウィーニウムからカストールとポッルケースがローマに伝えられた可能性を考え(26)、ローマ人は双子神を外来の神と認識しなかったのでポーマーリウムの中に神殿を建立したと考えている。ラーウィーニウムの祭儀では、双子神がディオスクーロイではなく単にクーロイと呼ばれていたため、国家祭儀の中で神々の系譜を語らないローマ人にとっても、違和感を感じることなくラテン人の神として受け入れることが出来たのだろう。

3. 霊廟

13祭壇とサンタ・マリア・デッレ・ヴィーニエに挟まれた区域では、もう一つ重要な遺跡が見つかっている。

祭壇の東約100メートル、教会から北に約200メートルの地点で、農作業中に黄色凝灰岩の大きなブロックが掘り起こされていたが、1968年に行

われた発掘調査で矩形と方形の二つの部屋が出土した。矩形の部屋は、北東側の長辺が外に向かって開かれ、方形の部屋は反対側の奥の辺に沿って配置されている（全体の大きさは奥行きが約8メートル、幅は約5.4メートル）。房（cella）と前房（pronaos）から成る社に典型的な構造で、奉納品も出土していることから（前房の床からは、ミニチュアの容器が多数見つかった）、これが霊廟だったことに間違いはない(1)。

房と前房は重機を用いた農作業により破壊され、凝灰岩のブロックを積み重ねた壁は、基礎と一番下の列の一部が残るにすぎない。前房の床は凝灰岩の破片で打ち固められている。発見された当時、その上には2個の大きな直方体の石のブロックが倒れていた。床と接触していた面には平縁の文様が彫り込まれ、それらが房と前房をつなぐ石造りの門の扉だったことは確かである。ただこれは金具付きの木製扉を模したもので（一つの扉には、石に彫った取っ手が残っている）、実際に扉として使われることはなかったらしい。

二つの部屋の発見のあと、房の背後の地域全体にわたって進められた発掘で、更に箱形の墓が見つかった。墓は、東西に縦2.5メートル、南北に幅1.6メートルの穴を掘り、壁に沿って凝灰岩のスラブを立てて、上を凝灰岩の蓋で覆ったもの(2)。発掘当時、房の南の角の基礎が下の石室墓の内部に食い込んでいた。つまり、霊廟の房は、既に存在していた石室墓を掘りかえし、その北側壁面のスラブを一部取り除いて、そこに基礎を食い込ませて作られたと考えられる。石室に食い込んだ房の角から少し離れた所には、アーケイック・タイプのアンフォラが、鉄製の先が渦を巻いた物体（lituus?）および木製の物体と一緒に埋められていた(3)。

石室に収められていたはずの副葬品の一部は、石室の外で見ついている。これは古代に盗掘にあったとき、犯人が落として行ったものか、それとも石室を覆っていた凝灰岩のスラブが砕け落ちた時の圧力で、外に投げ出されたのだと考えられる。石室内にはあまり多くの副葬品は残っていないが、石室を囲む溝からも豊富な副葬品（陶器、鉄・青銅製品）が出土し(4)、特に陶器は、古ラティウム Latium vetus のオリエント化期（第IV期A、B：前730/20～580年）の文化を一望させる資料を提供している(5)。

1968年の発掘では、これら以外に、墓の周囲を取り巻くように置かれていた石の輪の一部が掘り出されている。これは盛り土を支えるためのもので、墓は直径約18メートルの土饅頭だった。

墳墓が作られた年代と、そこに霊廟が築かれた年代は、出土した陶器などから推測がつく。石室の中から出土した副葬品の中に前7世紀中葉のものと推定される銀製のピンが含まれ(6)、他の副葬品の年代も概ね前650年頃を下限とするので、墳墓が築かれたのは前7世紀半ばである。ただ問題は、副葬品の中に前6世紀半ば以降に作られた重々しいブッケロ (*bucchero pesante*) のオイノコエが含まれること。これに関して *Sommella* は、二様の説明を試みている。つまり、墳墓が荒らされたあと、ブッケロ製のオイノコエを立てて死者を新たに供養したか、或いは、当時(前6世紀の半ば)墳墓で祭儀が始まった。第13祭壇の東にあった建物でも、竣工の儀式で使われたと思われる同種のオイノコエが敷居の下から出土しており、また最古の3基の祭壇が置かれたのも前6世紀の半ばであることから、これらは互いに関係があり、この頃に南の神域が開かれたと推測することができる(7)。

墳墓が霊廟に改造されたのは、前房の舗床の上と瓦解した房の壁の下で破片が見つかった黒色釣り鐘形クラテール(8)から推測して、前4世紀の末のこと。土墳の周縁近くからは、紀元後3世紀に属する覆いの付いた墓穴 (*tomba con copertura alla cappuccina*) が何基か見つかっている。恐らくこの頃までには、霊廟としての役割は終わっていたのだろう(9)。

霊廟は、以下のようにして作られたと考えられる。まず、周縁から中心に向かって土墳の一部を切り取り、切り取った面に凝灰岩のブロックを積み重ねて前房が作られた(10)。前房には屋根がなく(11)、ここは供物を奉納する場所として使われたらしい。外界とは柵で区切られていたのだろう。次に、房が墳墓の盛り土の中に作られた。前述のごとく、房と前房をつなぐ観音開きの重い石の扉は装飾の意味しか持っておらず、房の中に人が入ることは想定されていなかったらしい。この推測は、房には舗床が施されていないことから裏付けられる。房には棺はなく、霊廟は祈念碑 *kenotaphion* だった。

南の神域で霊廟跡が発見されると、発掘を担当した **Sommella** は、これをハリカルナッソスのディオニューシオスが伝えるアエネーアスの霊廟 (ἡρώων) に同定する提案を行った(12)。ディオニューシオスによると、それは「大きくはない土墳 (χωμάτιον) で、周りには樹が一行に植わって」いて、「ヌミクス川の流れを支配する父なる冥界の神 (πατήρ θεὸς χθόνιος) のもの」という銘文が刻まれていたという。これは、メゼンティウスとの戦いのあと姿が消えたアエネーアス (神となったとも、近くの川で溺れたとも言われる) のためにラテン人が建てたものだが、アエネーアスが父アンキーセースのために建てたと言う人もいた (*Dion. Hal. A.R.*, 1, 64, 5)。ディオニューシオスは、長年に亘るローマ滞在の間にローマ近郊の都市や遺跡を訪れている。この霊廟に関する証言もそうした彼の實見に基づくものと考えられ、信頼に値する(13)。

ところでリーウィウス (I, 2, 6) によると、アエネーアスは死後ヌミクス川の河岸に葬られたが (*situs est*)、人々はこの墓の主を、**Iuppiter Indiges** と呼んでいた (*appellat*) という。アエネーアスが死後、**Indiges** の名で祀られたことを伝える史料は他にも多い(14)。それ故ディオニューシオスがギリシア語に訳して伝える銘文は、原語に戻すと **pater deus Indiges** だったと考えられる。また“**Iuppiter**”に関しては、これが神の名前の一部として用いられた場合、単に“**divus pater**”の言い換えであることが多いとの指摘もあり(15)、もしこれが正しいとすると、リーウィウスが伝える **Iuppiter Indiges** も **divus pater Indiges** と同義の可能性がある。ディオニューシオスは **Indiges** を「冥界の神」の意味に理解しているが、ディオドーロス (XXXVII, 11Din.) はこれを γενάρχης という言葉で置き換える。結局のところ **Indiges** は古くから祀られていた神で、アエネーアスと結びついたのは二次的な現象だろうということ以外には分からない。ただディオニューシオスは、訪れた現地の住民から話を聞くことがよくあったようなので、**Indiges** を χθόνιος と訳したのはそうした伝聞に基づく、つまり当時のラーウィーニウムでは、実際にそのような解釈が行われていた、と考えたい(16)。

Sommella が先ず注目したのは、ディオニューシオスが伝えるアエネーアスの霊廟が「大きくはなく」、完全に周囲から孤立していることで、これは南の神域で出土した霊廟と一致する。しかも、南の神域の霊廟のごく近くをフォッソ・ディ・プラティカ (古代のヌミクス川) が流れるが、これは、アエネーアスの

墓について記すリーウィウスや Origo の著者が強調する点である。更に、南の神域があるラーウィーニウムの南西は、緩やかな傾斜をなし、このあたりでは深い天然の溝で遮られていない唯一の地域である。ディオニューシオスは、こうしたラーウィーニウム周辺のトポグラフィーに関する知識を基に、ここをラテン人とメゼンティウスの率いるルトゥリー族との戦いの場に想定したのだろうと、Sommella は推測する(17)。

この Sommella の同定に対しては、批判や懐疑的な意見も多い(18)。一番の理由は、霊廟がフォッソ・ディ・プラティカ（ヌミクス川）から 800 メートルも離れたところに存在し、リーウィウスや Origo の著者の証言が与える印象に合わないことである。しかしリーウィウスや Origo の著者は、恐らく文献に伝わる伝承に従ってアエネーアスの墓をヌミクス川の河岸に置いたのであって、ラーウィーニウムの人々が「アエネーアスの墓」を実際にどこに置いていたかについて正確な知識を持っていたわけではないだろう。「アエネーアスの墓」は、歴史上いつの時点かにラーウィーニウムの人々によって作られた。彼らはその場所を選ぶにあたって、伝説でアエネーアスが葬られたと言われる場所を求めるより、現実に存在する墓を選んで、これを改造したと考えられる(19)。もとより Sommella の同定は一つの仮説でしかない。しかしディオニューシオスの記述から得られる印象と南の神域で見つかった霊廟の間にはある種の一致が見られるのは事実であり、他方でこの同定を否定する人々は、史料の文言に囚われすぎて自分の視野を狭めてしまっているように見える。こうした状況を勘案して私は、南の神域にある霊廟をディオニューシオスが見た霊廟に同定する部分で、Sommella の仮説を支持したいと思う。

Sommella は更に、インディゲスの名で霊廟に祀られていた神は、神化したアエネーアスだと考える。しかしこの部分は、もう少し厳密な言い回しをする必要があるだろう。先ず Poucet も指摘するように、ディオニューシオスが訪れた霊廟は Pater Deus Indiges Numicius に捧げられたもので、霊廟の銘文にはアエネーアスの名はなかった。Poucet は、南の神域で出土した霊廟はせいぜいのところ近くの川と結びついたローカルな半神インディゲスを讃えるために前 4 世紀に建立されたものだ、と考える(20)。これに対して Castagnoli は、インディゲスは Poucet が考えるようなローカルな半神 un eroe locale ではなく、太陽神 Sol

と同一視される非常に古い神格だと指摘し、この神のために古い *tumulus* の中に *kenotaphion* を築くのは相応しくないように思えると主張する(21)。しかしインディゲスがソルと同一視される古い神格かどうかの問題は置くとしても(22)、Castagnoli の反論からは、南の神域の霊廟がまさにアエネーアスの霊廟だという結論は出てこないだろう。それ故私は、Poucet の批判はある意味で問題の核心を突いていると考える。

ディオニューシオスによると、霊廟で祀られていた「ヌミクス川の流れを支配する父なる冥界の神」を、ある人はアエネーアスだと言い、他の人は父のアンキーセースだと言っていた。ローマの国家宗教が祭儀のなかで神話を極力排除したことは、よく知られている。前4世紀の終わりに南の神域の全体的な改修の一つとして行われたと考えられる土壌の霊廟への改造には、恐らくローマの公的な関与があった(23)。霊廟には、ローマ人が国家の祖として仰ぎ、支配者としてのローマ人の地位を正当化する神が祀られたと考えられるが、その祭儀における呼び名はユピテル・インディゲスであり、神話的連想を呼び起こすものは一切含まれなかったはずである(24)。リーウィウスが墓に葬られた人物を「なんと呼ぶのが人の法・神の掟にかなおうとも」と非常にもって回った言い方をしているのも、そうしたことが背景にあるのだろう。

霊廟がアエネーアス伝説と結びつけられたとしても、それは公的な祭儀の外でのことであり、その為当初は伝承の一元化も試みられなかった。霊廟に祀られたヘーロスが誰かで、人により言うことが異なるのはそうした状況を反映していると考えられる。

アエネーアス伝説が何時、どのような経路でラテン世界にもたらされたかは分からない(補遺1)。いずれにせよ、ローマ人はギリシア世界からもたらされたアエネーアス伝説を受容し、自分たちの過去の物語とした。そこには、南イタリアのギリシア人に対して、彼らとの親族関係を示したいという願望が働いていたかもしれない。しかしそれと同時に私たちは、ラーウィーニウムの新しく作り直された神域の意味を説明する試みも考慮に入れてよいだろう。神域で行われる公的な祭儀の中では、アエネーアス伝説への言及は一切なかった。しかしそのことは、アエネーアス伝説が公的な祭儀の外で神域と結びつけられ、

語られたこと排除するものではない(25)。そしてこの「語り」は、ローマの支配の正当性を根拠づけるという優れて政治的な目的から、神域を訪れる人々の好奇心を満たし、或いは彼らの信仰を呼び起こす目的まで、様々な意図のもとに、様々な場で、様々な人によって行われただろう。私たちはローマの宗教について考察するとき、国家祭儀の中で神話を極力排除する一方で、国家祭儀の外では神話や伝説（その多くは、ギリシア人を始めとする他の民族から借用したものだったかもしれないが）を熱心に語るという、この二つの一見すると相反する傾向が一人の人、一つの民族の中に同時に存在した事実を、見逃してはならないのである。

第2章 註

(1) 建物に使われたテラコッタが出土品に含まれるので神殿も存在したと推測されるが、その遺構はまだ発見されていない。

1. 祭壇と建物跡

a. 祭壇

(1) 第8祭壇は古い祭壇の基部の上に *prothesis* を置き、その上に新しい祭壇（前3世紀のもの）が据えられている。下の祭壇と第13祭壇は様式が同じ。*Lavinium II*, 45-53; 116-9.

(2) 現存する第9祭壇は前4世紀の後半に作り直されたもの。この時、第9祭壇は第8祭壇の横に移され、同じ台座の上に更に3基の祭壇（第10、第11、第12）が置かれた。

(3) *Enea nel Lazio*, 179, D17.

(4) *Castagnoli, Lavinium II*, 4 は漸進的な増加を考えるが、*Giuliani, Enea nel Lazio*, 171 は、前450年頃に行われた全体的な神域の改修を考えているようである。

(5) *Lavinium II*, 3-5 (*Castagnoli*); *Magna Grecia*, 94sq. (*Castagnoli*); *Enea nel Lazio*, 169 (*Giuliani*); *Giuliani-Sommella* (1977) 356-360; *Holloway* (1994) 129-32.

(6) *Castagnoli* (1959/60) 145-72. cf. *Castagnoli* (1977B) 347-9; *Lavinium II*, 89-174 (*L. Cozza*).

(7) ギリシア世界では、祭壇は東に向けて置かれるのが一般的だったようである。cf. *Vitruv. IV*, 9, 1 (ウィトルーウィウスは多分ギリシアを念頭に置いている)。cf. *Castagnoli* (1959/60) 155 n. 43; *RE I*, 2, 1655, s. v. *Altar* (*Reisch*).

- (8) Castagnoli (1959/60) 155-9 は、パエストゥムのヘーラーの神域、アグリゲントゥムのデーメーテールとコレーの神域、そしてオリュンピアを例として挙げる。こうした例は、イタリキの世界ではあまり見られないという。
- (9) この種の小祭壇はエトルーリアからは出土例が少なく、しかもそれらはファリスキーの領土にほぼ限られると言う。Castagnoli (1959/60) 162.
- (10) Castagnoli (1959/60) 167sq. (ドーリア式の柱頭からインスピレーションを得た可能性は否定しない)

b. 建物跡

- (1) ここで出土した陶器の大部分は日常の什器として使われるものである。
- (2) 竣工の時に埋められたと思われるブッケロ製の大型オイノコエが入った壺が出土している。Giuliani-Sommella (1977) 361.
- (3) Giuliani-Sommella (1977) 361-5; Enea nel Lazio, 169-177.
- (4) Enea nel Lazio, 169-71.
- (5) 部屋 I の北側と東側の壁に沿って矩形の部屋 VI と IV が建てられ、建物の東の端、部屋 IV の壁に沿って屋根のない部屋 VII が作られた。小部屋 V と VIII は、それぞれ部屋 IV と VII から入る。建物の増築に伴い、北側の運河は水路を移されたのだろう。再建された建物も、北側と東側が完全な壁となっており、神域の境界との関係を想像することができる。
- (6) Giuliani-Sommella (1977) 362.

2. 碑文

a. ケレース碑文

- (1) 見つかったとき、鉄の釘の一部がついていたという。
- (2) Guarducci (1951) 99-103.
- (3) Ceres は野と穀物を守る非常に古い女神だが、ここからこの単語はパンの意味を含むようになり、更に食事の意味でも使われるようになった。
- (4) Guarducci は供された食物から神を同定することはできないと主張する中で、アテナイではディオスクーロイに *πάσσα* (*porra*) が供された (Athenaeus, IV, 137e) と指摘している。Guarducci がこの知見を排する理由は不明。一緒に出土した奉納品から得た神のイメージに合致しないように思えたのかもしれない。しかし、偶然であろうが、実際にこの後祭壇の側でカストルとポルクスへの

奉納碑文が見つかっている。

(5) Guarducci も 1959年の論攷では、食物一般ではなく内臓について言われていることを認めている (*viscere bollite*: Guarducci (1959) 206)。唯一 P. Mingazzini が *Auliquoquia* をケレースの祭とする説を提示しているが (註(33)を参照)、説得力はなく、彼の説を支持する研究者もいない。

(6) Guarducci は初期の喜劇 (cf. Naev. com. 121) の用例を根拠に *Ceres* を *cena* の意味で用いられていると解釈した。

(7) Le Bonniec (1958) 464 によると、*ceres* が食事一般の意味で用いられることはなかった。Guarducci 自身、後に *CERERE* が換喩で使われているとする解釈を放棄している (Guarducci (1959) 206)。

(8) Weinstock (1952) 35. Weinstock は、Guarducci が *vesperna* を夕食と解釈する際の論拠として挙げた Paul.47L.; 457L.; 505L.について、これらの箇所から読みとれる情報はせいぜいのところ「ウェッリウス・フラックスの時代には *vesperna* という言葉は廃れていた」こと、そして「フラックスはプラウトゥスの喜劇でこの言葉を見つけて、それを *cena* という言葉で説明した」ことにすぎず、それ以外はすべて研究者の解釈だと主張する。

(9) Weinstock (1952) 35sq. Weinstock は、両者に共通する語根として **vesqu-* (cf. *vesc-or*) を推測する。ただ *Vesperna* の -*rn-* に注目すれば、これはエトルーリア系の氏族が祀っていた神で、後にケレースと結びつけられるようになったと解釈することも可能だが、その場合、普通名詞の *vesperna* は別の語根から派生したと考えざるをえず、この解釈は説得力が低いと主張する。Weinstock (1952) 34 は更に、*auliquoquibus* は -*quus* (cf. Varr. l.l.5, 98: *exta ollicoqua*.) ではなく、-*quox* (cf. Paul. 21L.: *aulicocia exta*) の変化形、つまり、能動・受動の意味の *coquus-cocus* と並んで、**cox* という形があったという解釈を提示している。

(10) Bloch (1954) 205sq. Le Bonniec (1958) 465 も *VESPERNAM* が神の名であることを否定する。彼は普通名詞の *vesperna* (夕食) を *vesper* から派生した語と考えるので、神 *Vesperna* が Bloch の言うように *vescor* から派生したとすると、*vesperna* と *Vesperna* は共通点を全く持たない同音異義の言葉ということになると指摘し、Bloch の解釈が認めがたい理由の一つに挙げる。ただ Weinstock 自身は、*vesperna* と *Vesperna* に共通する語幹は何かを問うた結果、*vescor* の語幹に至っている。もし Le Bonniec が Weinstock の解釈を批判するのであれば、*vesperna* と *vesper* に関係づけるのは研究者の推論にすぎないという部分を先ず問題にす

べきだろう。

(11) Le Bonniec (1958) 465.

(12) Bloch (1954) 206 et n. 2.

Bloch は、ラーウィーニウムでリーベルの祭が行われたことを伝える史料 (Augustin. C.D. VII, 21) とケレース碑文から、ラーウィーニウムではケレース、リーベル、リーベラの三神が祀られており、この祭儀がローマに伝えられたと推測する。ハリカルナッソスのディオニューシオスはアウエンティーンヌス丘の神殿建立を前5世紀の初頭に置くが、その縁起に関しては二つの矛盾した伝承を伝えている。

(i)前496年の飢饉の時にひもどかれたシビュラの書は、デーメーテール、ディオニューソス、コレーの3柱の神々を鎮めるよう命じていた。ディクタートルだったアウルス・ポストゥミウスは、ラテン人との戦争を前に3柱の神々に祈願し、もし飢饉が終息して豊饒が戻れば神殿を建立することを約束する。祈願は成就し、ポストゥミウスはレギッルス湖の戦いのあと神殿の建立を命じた。(Dion. Hal. VI, 17)

(ii)3年後にスプーリウス・カッシウスがアウエンティーンヌス丘の神殿を献堂。祈願はラテン人との戦争の勝利を願って行われたもので、建立のための費用としてラテン人から奪った戦利品が充てられた。(Dion. Hal. VI, 94, 2)

Bloch によると、(i)は前3世紀以降、ローマの宗教が急速にギリシア化し、アウエンティーンヌス丘の祭儀が次第にギリシア起源のものと感じられるようになり、またシビュラの書が次第にギリシア的な性格と内容を帯びるようになった段階で作り出された縁起。他方(ii)のポストゥミウスの祈願はエーウオカーティオーに近く、伝承はローマ的な色彩が強い。ポストゥミウスは、レギッルス湖の戦いを前に、ラテン人のメトロポリスであるラーウィーニウムで祀られていたラテン人の保護神(ケレース、リーベル、リーベラ)に祈願し、戦いの最中に敵であるトゥスクルムの守護神ディオスクーロイに祈願した。このように、ディオスクーロイの祭儀とケレース、リーベル、リーベラの祭儀の導入は、ラテン人と神の共有を図り、「宗教のレベルでカッシウスの和約に対応する」ものだった。ただ Bloch は、ケレース、リーベル、リーベラがトリアスとして一つの神殿に合祀されたのは、エトルーリアの影響を受けたローマに始まると考えている。Bloch (1954) 207-210. しかし J. Bayet によると(i)は信憑性がなく、従って(ii)も疑わしい (cf. Bloch (1954) 212)。

Dury-Moyaers (1981) 181-98 は、二つの贄が離して置かれていることを難点とを認めつつも、Bloch が提示する碑文の解釈に従い、南の神域を農耕神崇拝の本拠地と見る仮説を展開している。

(13) Bloch (1954) 212.

(14) Le Bonniec (1958) 465.

(15) Le Bonniec (1958) 466. ただ副詞に解釈するとしても、ある時から信者に対してこの義務が課せられるようになった理由が分からないのでこれも完璧な解釈ではないと指摘して、PORO が我々の知らない単語である可能性にも余地を残す。

(16) Peruzzi (1959) 221.

(17) Peruzzi (1959) 216sq.

(18) Guarducci (1959) 207. *vesperna* は *vesper* から作られた形容詞の名詞化。ただ、Guarducci は *vesperna* と *Vesperna* の間に直接の関係があるとは考えていない。

(19) Guarducci (1959) 208.

(20) Le Bonniec は、碑文の PORO が *porrus* の奪格であることを否定する根拠として、ローマ人はニラネギやタマネギを贄として神々に捧げることはなかったと指摘するが、Guarducci (1959) 206 は、ギリシアの宗教ではニラネギの奉納は知られていると反論する。同じ文脈で Guarducci (1959) 210 は、ギリシアのデーメーテールとコレーがシキリアとクーマエを介してラティウムに伝えられ、土着の古い神ケレースとリーベラに重ね合わされたとも指摘している。彼女の脳裏にはコレー＝リーベラ＝ウェスペルナの関係があるのだろうが、論文ではラーウィーニウムに近いアリーキアがケレースとリーベラの祭儀の中心だったことを指摘するに止めている。

(21) Magna Grecia 22-27. Heurgon によると、ステシコロス Stesichoros の『イーリオンの略奪』は、アエネーアスが、ラティウムの海岸に新しいトロヤを築くという、運命により定められた目的に導かれて西方に到来することを、主要なテーマとしていた。

(22) Guarducci (1976) 424.

(23) Castagnoli (1959) 116 n. 43.

(24) Latte (1960) 70 n. 1.

(25) Wagenvoort (1961) 219sq.

(26) Wagenvoort (1961) 220sq. Wagenvoort は修正の試みを、碑文には彫り間違いが希でないことを指摘する H. Dessau の文章を引いて正当化する。

(27) Wissowa (1912) 419sq.

(28) Wagenvoort (1961) 222.

(29) Gurarducci (1976) 416.

(30) Pugliese Carratelli (1968) 340.

(31) Guarducci (1976) 417.

(32) Schilling (1972) 319 et n. 9. 訳文を読む限り、Schilling は poro を por<ricit>o と解釈する説を支持しているらしい。同じ巻で Wagenvoort は、ローマ古来の宗教の研究を困難にしている要因の一つに現存する文献史料および碑文史料のテキストが不確かなことを挙げ、例としてケレース碑文を引いて poro は誤記で、poplo に訂正すべきだとの主張を繰り返している (Wagenvoort (1972) 349 n. 1)。

Schilling が同巻に収録の論攷で Wagenvoort の提案に言及していないことを「見落とし」(Wagenvoort) と決めつけられるかどうかは、分からない (ビブリオグラフィには Mnemosyne に掲載された Wagenvoort の論攷も挙げられている)。

(33) Lavinium II, 441 et 443sq.

以下、筆者未読の論攷を挙げておく。

U. Scamuzzi は 1963 年の論文 (Studio sulla lamina bronzea di Lavinio scoperta nell' anno 1949, Rivista di studi classici, 11 (1963) 280-285) で、PORO を postea に理解する提案を行っている (Lavinium II, 444)。これに対し Guarducci (1976) 417 は、poro が postea を意味する例は他にないし、Scamuzzi の解釈に立つと、このプレートより前にもう一つのプレートが取り付けられていたことになるが、ラーウィーニウムで見つかったブロックは、それぞれ一つのプレートの跡しか残っていない、と言って批判する。このプレートは、釘穴の数や位置が出土したブロックのどれとも一致しないので、Guarducci の最後の指摘は決定的ではないが、poro に postea の意味を読みとるにはやはり無理があるだろう。

1968 年には P. Mingazzini, La lex sacra di Lavinio. in: Festschrift Gottfried von Lücken, Wissenschaftliche Zeitschrift der Universität Rostock 17 (1968) 711-713 が Auliquoquibus をケレースの祭りとする説を発表した (Lavinium II, 444)。Mingazzini は、碑文を「ケレースを讃える祭りアウリコキアに参加したい人は、少なくとも一個のニラネギを寄進すること」の意味に理解しているが、Guarducci (1976) 417 も指摘するように出来すぎた解釈で、しかもアウリコキアという祭

りの存在を伝える史料は全くない。

1972年に発表された R. Arena の論攷 (in: *Rendiconti Istituto Lombardo*, 106 (1972) 448-450) は、PORO を puero (与格) = Libero に理解してケレースとリーベルへの奉納を記すと解釈する案(「ケレースには煮た内臓で供犠を行うこと。ポル (=プエル) には夕食を捧げること」と、PORO は por (即ち、porcus) の属格として AVLIQVOQVIBVS に掛ける案(ケレースに豚の内臓からなる夕食を捧げよ)) の二案を提示している (Lavinium II, 444)。いずれの案も、PORO の解釈にこだわりすぎて、他の問題を軽視しているように思える。

(34) CERERE が対格である場合、語尾の m が脱落した理由を Guarducci (1976) 417 は後に続く単語が母音で始まることに求めている (VESPERNAM は、続く単語が子音で始まるので m の脱落はない)。

(35) Guarducci (1976) 417.

(36) 「これ以降」(Vendryès) に対する批判は、註(15)) を見よ。「この前に (qui innanzi)」(Pugliese Carratelli) に対しては、Guarducci の批判 (註(29)) を参照のこと。「(晚餐、或いは夕方) の前に」(Castagnoli) は、Castagnoli 自身あくまで一つの可能性として提示するにすぎない。

(37) 1984年に上梓された M. Torelli の浩瀚なモノグラフの中でもケレース碑文が扱われているが、著者は四つの文字の解釈を巡る論争に身を投じることにはせず、専らラーウィーニウムの神域とローマの宗教との関係を巡る仮説を補強する為にこの碑文を利用している。そのため碑文を解釈する根拠が必ずしも明白でない。例えば Torelli は、ディオスクーロイ碑文は奉納像の台座に取り付けられたものかもしれないが、ケレース碑文は祭壇の上部 plinthos の前面に取り付けられていたと主張する (Torelli (1984) 162)。しかし、これを否定する先行研究に対する批判はなく、Torelli の推論の根拠も示されていないのである。また碑文の文字についても、Torelli は CERERE を対格、VESPERNAM を神の名、PORO を porrus (porrum) の奪格と解釈し、この解釈に立って論を進めるのだが (Torelli (1984) 164)、他の解釈を批判することによって自らの解釈を正当化する試みはない。Torelli にしてみれば、碑文自体の解釈と彼の提示する仮説は相互補完の関係にあり、彼の取る碑文の解釈がこの仮説を補強するとともに、その仮説が碑文の解釈の正しさを保証するということだろうか？

b. カストール碑文

- (1) Castagnoli (1959) 109sq.; Lavinium II, 441-3. プレートは2枚に割れた状態で、左半分は第8祭壇と第9祭壇の間から、右半分は第7祭壇の左の角近くから出土した。2枚の断片を合わせると帯状の板となるが完全な長方形ではない。長さは最大の箇所では29.1センチ、高さは5.3センチから5センチ、厚さは0.1センチから0.15センチ。なお Guarducci (1976) 412によると、プレートは銅板だという。
- (2) Castagnoli (1959) 109sq.; Lavinium II, 441; Magna Grecia, 19sq. (J. Heurgon).
- (3) Castagnoli (1959) 110. Lavinium II, 441sq.では、特にラピス・ニゲルとの比較の結果を基にカストール碑文を前6世紀の末に置いている。J. Heurgon, Magna Grecia, 20は、プレートの年代は第13祭壇の地層より少し下で出土した前550年頃のアッティカ陶器の破片と同時代か、それよりも古いと考える。
- (4) Castagnoli (1959) 110sq.; Lavinium II, 442.
- (5) Castagnoli (1959) 111. Lavinium II, 442では断定的 (evidente forma di transizione fra Πολυδεύκης e Polluces)。なお、エトルーリア語 *Pultuke* を介在させる説は、Devoto (1928) 323sq.によって否定されている。
- (6) Castagnoli (1959) 111.
- (7) Lavinium II, 442 et n. 4.
- (8) Radke (1964) 216. Radkeはこの現象を *regressive Fernassimilation* と呼ぶ。既に述べたように *auliquoquibus* は *olla* と *coquere* から作られた言葉であり、事実ワッロー (l.l., V, 104) は *exta ollicoqua* という形を伝えている。従ってケレース碑文の *auliquoquibus* についても、*qu(ibus)*が前の *c(o)*を唇音化したと想像することが可能。
- (9) Lavinium II, 442; Radke (1964) 216sq. cf. Leumann (1977) 98.
- (10) 周知のごとく古典ラテン語のアクセントは、単語の最後から数えて第3音節より前に遡ることはない。この現象が現れるのは前4世紀頃のことと、それ以前は語頭にアクセントが落ちた。ただこの語頭のアクセントはラテン語に本来のものではなく、他の言葉 (エトルーリア語?、オスク語?、ケルト語?、ゲルマン語?、地中海原住民の言葉?) の影響を受けて始まったと想像されている。語頭のアクセントが始まるのをいつ頃に想定するかは、研究者により見解が異なり、Leumannは遅くとも前6、5世紀には起こったと考える。Leumann (1977) 246-8.
- (11) Weinstock (1960) 112.
- (12) Lavinium II, 442.

(13) R. Bloch, *Revue de Philologie* 34 (1960) 189: Δ と Λ の混同 (筆者未見。Radke (1964) 217 n. 3 に依る)。

(14) V. Pisani, *Paideia* 15 (1960) 242: -II- (cf. Polluces) が d の l への同化であることを知っていた職人が昔の綴りで記そうとしたが、順番を間違えた (筆者未見。Lavinium II, 442 n. 6 に依る)。

(15) Radke (1964) 218 も指摘するように、-dl-から-II-への同音化はラテン語で珍しくない。それ故、Πολυδεύκης から Polluces へ変化する中で *Podlouces (cf. Podlouquei) を想定することは音韻変化の法則にかなっている。

Leumann の『ラテン語文法 第1巻 ラテン語の音韻論と形態論』の新版は1977年に出版されたが、その基礎となっているのは1926～1928年に出版の第5版で、カストール碑文は補遺で扱われているにすぎない。*Poldouces (< Πολυδεύκης) から Polluces への変化に関しても、-dl-の段階をとばして-ld-から-II-への変化と捉え、閉鎖音の前の l 音が後に続く子音を自らに同化する現象として説明している (214sq.)。ただこの音韻変化の例は少なく (sallo < *saldo, percello < *perceldo を挙げうるのみ)、しかも Radke (1964) 217 は、この同音化はもともと隣接した子音間に起こった現象で、synkope の結果隣接するようになった子音間では起こらなかったのではないかと考えている。

(16) Radke (1964) 218. Radke はラティウムで作られた *Poduloukes がエトルーリア人の間に伝わって Pultuke (Pultuke) となったと考える。

(17) Radke (1964) 218 n.2.

(18) Leumann (1977) 70sq. ラテン語の名前 Lucius は、古い時代のギリシア語の文献では常に Λεύκιος と書かれている。Lucius は古くは *Loucios (cf. osk. Lúvkis) だったらしい。後には正書法で Lucius と綴られるようになったが、史書などの文献では常に省略形 (L.) が使われた。

(19) Castagnoli (1959) 113. Heurgon (*Magna Grecia*, 21) は、カストールとポリュデウケースがゼウスの子と認められるようになったのはホメロス賛歌によってだが、ラーウィーニウムに二人の英雄を伝えたギリシア人は、この系譜をまだ知らなかったと考えている。

(20) Lavinium II, 442.

(21) -ois が古ラテン語の語尾であることを強く主張するのは、Radke (1962) 215. Leumann (1977) 428 は、古ラテン語の語尾として -ois の存在は認めるが、カストール碑文の quois に関しては、ギリシア語の転記かギリシア語から借用され

たラテン語かの判断は保留する。

(22) *κοῦροι* は *κόροι* のイオニア方言や叙事詩に現れる語形。イオニア方言からの転記を考えるのは Castagnoli の他、Heurgon, *Magna Grecia*, 21sq.

(23) イタリアのドーリス系植民市から借用されたラテン語の単語で $\omega > u$ の変化が確かめられる (*κῶπη* > *cupa*, *τρώκτης* > *tructa*. cf. Leumann (1977) 76)。ドーリス方言からの転記ないしは借用を考えるのは、Pugliese Carratelli (1962) 18 や Radke (1964) 215. Dury-Moyaers (1981) 202sq. は、南の神域からディオスクーロイを描くラコニア製の杯（前6世紀）が出土していることから、ラーウィーニウムのディオスクーロイ祭儀は南イタリアのドーリス系植民市（タレントウムかロクリス）からもたらされた、と考える。

(24) Heurgon, *Magna Grecia*, 21sq.

(25) Pugliese Carratelli (1962) 18.

(26) Wissowa (1912) 269sq. によるとトゥスクルムから、Altheim (1930) 29 によるとアルデアからローマにもたらされた。de Sanctis (1953) 262 et nn. 594 et 595 は Pollux と Πολυδεύκης の間にエトルーリア語の *Pultuke* を要求する説を支持し (Devoto の批判は、論拠を示さずに否定)、ディオスクーロイはエトルーリアを介して（或いは更にトゥスクルムを介し）ローマにもたらされたと考える。これらはいずれもラーウィーニウムでディオスクーロイ碑文が出土する以前に書かれており、再検討を要することは言うまでもない。

3. 霊廟

(1) Sommella (1971/72) 47-74 (p. 47 n. 2 によると、霊廟を包括的に扱った Lavinium III が準備中とのことだが、管見の及ぶ限りまだ出版を見ていない) ; Sommella (1974) 273-97; Giuliani-Sommella (1977) 366-8; Enea nel Lazio, 169-186, ante omnia 172-5; Holloway (1994) 135-8.

(2) 発見されたとき、頭部に置かれた円盤状（三分の一ほどが切り取られた形をしている）の石を除き、棺を覆っていた蓋は碎けて墓の中に落下していた。

(3) Sommella (1971/72) 61sq.

(4) Sommella (1971/72) 62sq.

(5) Sommella (1971/72) 69.

(6) Sommella (1971/72) 56sq.

(7) Sommella (1971/72) 69; Sommella (1974) 288sq.

- (8) 破片は、少なくともクラテール6個分が見つまっている。
- (9) Sommella (1971/72) 55.
- (10) 前房のアンタは、土墳の周囲を囲んで置かれた石の輪の手前までしか延びていない。Sommella (1971/72) 70.
- (11) 凝灰岩の破片を加圧して作られた前房の床は、奥行き2.8メートルに対して20センチメートルの傾斜がつけられている。これは恐らく雨水の速やかな排水を目的としていた。Sommella (1971/72) 70.
- (12) Sommella (1971/72) 72; Sommella (1974) 291sq.
- (13) Andrén (1960) 88-104. Andrén はディオニューシオスの証言が実見に基づくと思われる例から三つの判断基準を導き出し、それによって検証した結果、ローマ近郊のモニュメントに関するディオニューシオスのコメントも、彼の個人的な観察に基づく主張する。
- (14) Radke (1979) 150 (s.v. Indiges) に挙げられている。
- (15) Preller, L / Jordan, H., *Römische Mythologie I* (3. Aufl.), Berlin 1881, 57 (筆者未見。Radke loc. cit.に拠る)
- (16) Liou-Gille (1980) 99-116 によると、(ローマの) Indigetes は冥界の神でも天の神でもなく、地上の神。おもな論拠は、リーウィウスが伝える devotio の formula で、列挙された神々が天の神 (Ianus, Iuppiter, Mars pater, Quirinus, Bellona)、地上の神 (Lares, divi Novensiles, di Indigetes, divi quorum est potestas nostrorum hostiumque)、冥界の神 (dii Manes) に区別されていると考えること。但し、ラーウィーニウムの Indiges については、判断を保留している (p. 115)。
- (17) もともと霊廟は(恐らくその前身である tumulus もまた)、祭壇群とともに大きな神域の一部を構成していたが、ディオニューシオスがここを訪れた頃には祭壇は投棄物の山に埋もれ、霊廟だけが廃屋に近い形で残存していたと思われる。だとすれば、ディオニューシオスがこの辺りをラテン人とルトゥリー族との戦いの戦場だった場所と考えたとしても不思議はないだろう。
- (18) Cornell (1995) 68; Poucet (1979) 181sq.; Dury-Moyaers (1981) 212 n. 162; Gruen (1992) 25 et n. 87. Poucet は、南の神域の霊廟がディオニューシオスの見た霊廟である可能性までは否定しない。他方で、Liou-Gille (1980) 120; Holloway (1994) 138; Torelli (1999) 166 など、南の神域の霊廟をディオニューシオスが証言する霊廟に同定する研究者も多い。
- (19) Gantz (1974) 358sq. et n. 32.

(20) Poucet (1979) 181sq. 但しアウグストゥスの時代、ラーウィーニウムを訪れた人々に対して地元の人々が、*tumulus* をアエネーアスを讃えたモニュメントと紹介した可能性は十分にあると言う。Poucet (1791) 182.

(21) Castagnoli (1982) 13 n. 64.

(22) Sol Indiges は、プリーニウス (n. h. III, 5, 56) がラーウィーニウムについて伝える他に、ローマの石のカレンダーも、8月9日にクィリーナーリス丘で Sol Indiges のために供犠が行われたことを伝える。cf. Alföldi (1965) 252sq. しかし上述のように、ディオニューシオスが見たと考えられる霊廟には、恐らく冥界の神としての Indiges が祀られていた。註(16)を参照。

(23) Dury-Moyaers (1981) 197sq. は、南の神域は農耕神の本拠であって、これをローマの高等政務官が供犠を行うのを常としたペナーテースの神域、或いはラテン人が共同で祭儀を行ったと言われるアプロディーシオンと見なす仮説は少しも確実ではないと主張し、この神域と政治との関わりを一切否定する。彼女はデュメジルの3機能論を援用して、ラーウィーニウムでは豊饒と大地（第3機能）の祭儀が宗教的雰囲気支配していたと捉えるのだが (p. 181)、この視点に立つと、何故ローマがラテン人同盟を解体してラティウムに覇権を築いた前4世紀の後半に、南の神域の大規模な改修が行われ、土壌が霊廟に改築されたのかの説明がつかない。Torelli (1984) も南の神域とヌミクス川河口の神域で祀られた神々とその祭儀をブドウの栽培とワインの製造に係る信仰と結びつけて理解するが、彼はラーウィーニウムの宗教の政治的側面を見失わない (eg. pp. 228-30; Torelli (1999) 166)。

(24) cf. Torelli (1984) 229sq. 『アエネーイス』のスコリアの断片は、アスカニウスが奉納した Aeneas Indiges の神域に神祇官 (pontifices) がコーンスルとともに、供犠を行うために毎年訪れたと記している (Scholia Veronensia in Verg. Aen. 259)。しかしここから祭儀の中でアエネーアスの名が呼ばれたと結論づけることはできない。Alföldi (1965) 255sq. は、アエネーアスに対する祭儀は、ローマでは行われなかったが、ラーウィーニウムでは営まれたと主張している。しかし私は、ラーウィーニウムでもローマの政務官が行う祭儀の中で呼ばれた神は Indiges であって、アエネーアスの名は呼ばれなかったと考える。

(25) Liou-Gille (1980) 133sq. の理解は、これとは異なる。すなわち、ラーウィーニウムのローカルな祭儀にホメーロスの伝説が結びつけられ、アエネーアスをラーウィーニウムの建設者とする伝説が、古くに出来上がった。他方で、ロー

マとラーウィーニウムの宗教上の関係も前338年以前に遡るが、ローマが祭儀を行ったのは、最初のうちはペナーテースとウェスタに対してであり、ラーウィーニウムの建設者アエネーアスには興味をもたなかった。しかしローマは、前3世紀を通してトロヤ起源の神話が持つ宣伝効果に気づくようになり、カエサルが叔母と母の葬儀で一族のトロヤ起源を誇ったとき、この神話は世論に十分受け入れられていた。この神話に文学的な形を与え、ドグマとしての権威を付与したのはウェルギリウスである。この Liou-Gille 解釈だと、霊廟で祀られている人に関してラーウィーニウムの人々の間で理解が一致しなかったことの説明つかない。

第3章 南の神域とラテン人共同体の祭儀

1. ラテン人祭

幾つもの小さな集落に分かれて古くからラティウムに住み着いていたラテン人たちは、同じ名を共有し (*nomen Latinum*)、同じ神々を祭り、また互いに似た制度のもとで暮らした。更に彼らは、共通の起源を物語る神話と共同で行う祭儀を通して、同一民族としての一体感を早くから育てていたと考えられている。

これらの祭りのうちで最も重要なものは、毎年春にラテン人がアルバーヌス山 *mons Albanus* (モンテ・カーヴォ) のユピテル・ラティアリス *Iuppiter Latiaris*(1)の神域に集まって行っていたラテン人祭 *Feriae Latinae* と呼ばれる祭である。この祭で犠牲として捧げられた牛は解体され、参加するラテン人共同体の代表に肉片が分け与えられた。つまり、*Feriae Latinae* で肉片を得ることが、ラテン人の一員と認知されていることの証しとされたのである(2)。

ラテン人の共同体が集まって行う祭 (すべてのラテン人共同体が参加するものも、一部だけが参加するものもある) はアルバーヌス山のユピテル神殿以外にも、アリーキア、トゥスクルム、ローマのアウェンティーヌス丘 (*Dion. Hal. 4,26,4sq.*)、そしてラーウィーニウム (後述) でも催されていたことが知られている(3)。

2. アプロディーシオン

アウグストゥスの時代の地理学者ストラボーンが伝えるところによると、ラーウィーニウムにはラテン人たちが共同で祭儀を行うアプロディーテーの神域 (アプロディーシオン) があつた。「これらの都市 [オスティアとアンティウム] の中間地点にラーウィーニウムがある。ここにはラテン人たちが共同で [祭儀を行う] アプロディーテーの神域があり、アルデア人が従者 (*πρόπολοι*) を使ってこれを管理している。続いて (*εἶτα*) ラウレントゥム。これらの彼方にはアルデアがある。これは海から70スタディオン [約13キロメートル] 登ったところにあるルトゥリーの植民市。この町の近くにも、ラテン人が集まって祭儀を行うアプロディーシオン [アプロディーテーの神域] がある。サムニ

ウム人がこれらの地域を略奪し、都市「複数」の痕跡が残るにすぎないが、この痕跡はアエネアスの滞在と、その時以来受け継がれているという祭儀によって有名である。」(Strabo, V, 3, 5 C 232)

研究者の中には、13基の祭壇を備えた南の神域をストラボの記すラーウィーニウムのアプロディーシオンだと考える人がいるが(1)、史料の状況はそれ程に単純ではない。確かにストラボ自身は、ラーウィーニウムとアルデアの両方にアプロディーシオンがあり、ラテン人はそれぞれに集うて祭儀を行う、と考えていたらしい。だが史料の中には一つのアプロディーシオンしか伝えないものもある。大プリーニウスは古ラティウムについて語る中で、北から南に地名を追って「先ずローマの王により築かれた植民市オスティア、ラウレンテースの町、ユピテル(ソル?)・インディゲスの聖所(或いは杜)、ヌミクス川、アルデア、かつてのアプロディーシオン、植民市アンティウム、・・・」と記す(n. h. III, 5, 56sq.: *In principio est Ostia colonia ab Romano rege deducta, Oppidum Laurentum, locus (lucus) Iovis (Solis?) Indigetis, amnis Numicius, Ardea a Danae Persei matre condita. dein quondam Aphrodisium, Antium colonia...*)。他方ポンポニウス・メラは、南から北に「アンティウム、アプロディーシオン、アルデア、ラウレントウム、オスティア」(2, 71:... *Antium, Aphrodisium (Aphrodisium), Ardea, Laurentum, Ostia*)と列挙している。こうした矛盾をどう解釈し、説明するかについて研究者の間で意見の一致はなく、同じ研究者でも時を違えれば別の主張をすることさえ見られるのが実情である(2)。

ストラボは、ラーウィーニウムとアルデアの間にラウレントウムという都市が存在したかのような言い方をしているが、実際には *Itineraria* が帝政期に築かれたウィクス・アウグスタヌス・ラウレンティウム *Vicus Augustanus Laurentium* をラウレントウムと呼ぶのを除けば(3)、ラウレントウムという都市が歴史時代に存在したことを証明する確実な史料はない。他方でラーウィーニウムの住民は、しばしば *Laurentes Lavinates* として碑文に現れ、ラーウィーニウムの領域は *ager Laurens* 或いは *ager Laurentinus* とも呼ばれている。研究者の中には、ラウレントウムという町の存在そのものを否定する人と(4)、ラウレントウムはラーウィーニウムが建設される以前に存在したと信じられていた伝説上の都市で、その住民はラーウィーニウムに吸収されたという伝承があったと

考える人がいる(5)。

ストラボンはこれより少し前で、父アンキーセースと息子アスカニウスとともにイタリアに到着したアエネーアスは、ラウレントウム(6)で下船し、海から24スタディオン(1スタディオン185メートルで計算して、約4.5キロ)ほど登ったところ(奥地に入ったところ)に都市を築いた、と述べている(V, 3, 2 C 229: φασί δὲ Αἰνεΐαν μετὰ τοῦ πατρὸς Ἀγκίσου καὶ τοῦ παιδὸς Ἀσκανίου κατάραντας εἰς Λαυρεντὸν τῆς πλησίον τῶν Ὀστίων καὶ τοῦ Τιβέρεως ῥόνος, μικρὸν ὑπὲρ τῆς θαλάττης, ὅσον ἐν τέτταρσι καὶ εἴκοσι σταδίοις, κτίσαι πόλιν)。

文章の構造を見ると、ラウレントウムでの下船と都市の建設は、前者がアオリストの分詞句、後者がアオリストの不定詞句で表現され、全体は「人々は伝えている(φασί)」という動詞の現在形に掛かっているため、アエネーアスが都市を築いたのは、彼が下船したラウレントウムと呼ばれる場所から24スタディオンほど奥地に入ったところと理解してよいだろう。このラウレントウムは「オスティアとティベリス川の近くの海岸」に置かれており、ストラボン(或いは、彼が従っている伝承)はローマの近郊をイメージしているらしい。ストラボンがアエネーアスをローマ近郊の海岸に上陸させようとしたことは、ラティヌス王の支配地域を「現在ローマがある場所」と説明していることにも現れている。

更にストラボンが準拠する伝承によると、ラティヌス王はアエネーアスと同盟を結んで、アルデアを占拠していたルトゥリーと戦い、勝利のあとアルデアの近くに都市を築いた。ストラボンは、この都市が彼の娘の名に因んでラーウィーニウムと呼ばれたと記すが(7)、多くの伝承はラーウィーニウムを建設したのはアエネーアスだと伝える。例えばハリカルナッソスのディオニューシオス(Ant. Rom. I, 56, 1-5; 59, 1-3.)は、アエネーアスがラティウムに上陸したあと、海から24スタディオン離れたところにある丘にラーウィーニウムを建設する話を長々と語っている。

伝承が錯綜していて整理に困るが、私は24スタディオンという距離に先ず着目したい。ストラボンもディオニューシオスもアエネーアスが建設した都市が海から24スタディオンばかり離れていたと記すのは、偶然の一致ではない

だろう。名称はともかく、二人がアエネーアスの建設に帰す都市は、もともと同一だったと考えられる。プラティカ・ディ・マーレから海岸までの距離は、直線で計ってほぼ4.5キロ、つまり24スタディオンほどである。それ故、アエネーアスが海岸から24スタディオンほど登ったところに都市を築いたという伝承は、ラーウィーニウムの建設を現実の地形を踏まえて語っていると言える(8)。ストラボーンによるとラーウィーニウムを建設したのはラティーンヌス王だった。しかしこれは、アエネーアスが上陸した場所をローマの郊外に移したため、彼が海岸から24スタディオンのところに建設した都市はラーウィーニウムではありえなくなったので、便宜的に考え出された話のように思われる。ストラボーンに残るヴァージョンも、アエネーアスが上陸した場所が移される以前は、恐らく彼をラーウィーニウムの建設者としていた。

ストラボーンは更に、アルデアが海から70スタディオン（約13キロメートル）登ったところにあると記している。しかしこれは明らかな誤りで、海岸からアルデアまでの距離は5キロもない。

これまでの議論から、ストラボーンはラティウムの地誌を記す上で幾つかの異なった資料を利用したことが推測される。ある資料は距離に関して正確な情報を伝えているが、別の資料は距離が不正確である。また、アエネーアスがイタリア半島に上陸した場所をティベリス川の河口付近としたことがストラボーンの単なる推測ではないとすれば、彼が使った資料の中には、アエネーアス伝説に関してオーソドックスなヴァージョンとは異なった話を伝えるものがあつたことになる(9)。ストラボーンはこれらの資料を繋ぎ合わせてラティウムの地誌を描いているのだが、ラウレントウムを実在の都市であるかのように考え、それをラーウィーニウムとアルデアの間に置くことから見ても(10)、彼の資料の使い方はかなり雑なところがあると言わざるをえない。つまり、彼がラーウィーニウムとアルデアでアプロディーシオンに言及していても、私たちは直ちに二つのアプロディーシオンの存在を受け入れるわけにはいかないのである。

プリーニウスは *Aphrodisium* の前に「かつて (quondam)」という言葉をしているので、彼の時代（紀元後1世紀）にはアプロディーシオンは既に存在していなかったと想像することができる(11)。神域に関する彼の知識は、おそ

らく文献に由来するのだろう。だとすれば、これをアルデアの南に置く順番は正確ではないかもしれない。しかし、アプロディーシオンをアルデアの南に置くのは、プリーニウスだけではない。ポンポーニウス・メラも南から北へ、アンティウム、アフロディシウム、アルデアの順に列挙する。メラはクラウディウス帝の時代に執筆し(12)、プリーニウスは彼の著作を利用している(13)。ただ私たちが問題にしている古ラティウムの地名を列挙した箇所は、プリーニウスの方が情報量が遙かに多い。メラとプリーニウスの一般的な関係として言われていること(14)を考慮に入れて、ここでも両者の記述は共通の資料に遡ると考えるべきだろう。それ故私たちは、メラとプリーニウスの記述を二つの独立した証言と評価することは出来ない。しかし二人が共に一つのアプロディーシオンしか伝えず、それをアルデアの南に置くのは、彼らの共通の資料がそうだったからだと考えられる。

こうした状況を念頭に置いて現存する記述史料を解釈するならば、以下のよう
に考えるのが最も妥当であるように思える。

- a. 記述史料で確かめうるアプロディーシオンは一つだけで、それはアルデア領域のアプロディーシオンである。
- b. ストラボがラーウィーニウムに存在すると伝えるアプロディーシオンは、アルデアのアプロディーシオンのドゥブレット。アルデアの管理下にあるというコメントにもそのことが現れている(15)。
- c. このドゥブレットは、ストラボが二つの資料を繋ぎ合わせた際、それぞれの資料に言及されていた神域を、実際には同じものであるのに、別の神域と誤解したことにより生じたと考えられる。

研究者の多くがストラボの記述をラーウィーニウムにアプロディーシオンが存在した証拠として用いるのは、ラーウィーニウムの南の神域をアプロディーシオンと考え、文献史料との整合性を求めるからである。ここで私たちは、考古学史料と文献史料の相互補完的な利用という、大変魅力的だが危険性も含む問題に直面する(16)。南の神域を取り巻く状況は、確かにこれがラテン人が共同で祭儀を行った場であった可能性を示唆している。しかし文献史料が伝えるアプロディーシオンはアルデアのもので、ラーウィーニウムにもアプロディーシオンがあったことを確証するものはない。私たちはこの文献史料と考古

学史料の乖離を、一つの現実として受け入れるべきだろう。

3. 南の神域とラテン人同盟の祭儀

南の神域には常に複数の祭壇が一行に並べて置かれ、前4世紀の終わりには、それは13基に達していた。このように一つの神域に幾つもの祭壇が、しかも一行に並べて置かれた理由は何か？G. Pugliese Carratelli は、南の神域を南イタリアのギリシア人諸都市から勧請されたギリシアの神々の集う一種の「神々の広場 (θεῶν ἀγορά)」に見立て、前4世紀に終わりには12柱の神々が祀られる **dodektheon** となっていた、と推測する(1)。この神域で祀られていたのはギリシアの神々で、しかも神ごとに1基の祭壇が奉納されていたと Pugliese Carratelli が考える根拠は、祭壇近くで見つかった神々の名を記す2枚の青銅のプレートである。しかしこれらのプレートは祭壇に付けられていたものではない。カストルとポルルクスへの奉納碑文を刻んだプレートは、恐らく奉納像の台座に付けられていた(2)。他の1枚はどこに付けられていたか不明だが、いずれにせよ、銘文は前3世紀のものだと推定されている。従って2枚のプレートを根拠に、祭壇の数をこの神域で祀られた神々の数に一致させることはできないだろう(3)。

Castagnoli は Pugliese Carratelli の解釈を一つの仮説としてその存在意義は認めつつも、もう一つの仮説として、複数の祭儀が同時に行われた可能性を考える(4)。こうしたことは、特に部族や都市国家の連合が共同で営む祭儀の場合に見られたらう。現存する文献史料が伝えるのはアルデアのアプロディーシオンに限られるが、これは、南の神域がラテン人にとっての共同の祭儀の場だった可能性を排除するものではない。

南の神域はラーウィーニウムの市域の外に位置するが、これは、この神域がラーウィーニウムの市民以外の人々に広く開かれていたことを窺わせる。勿論、市壁の外という条件は、ラーウィーニウムの領域で見つかった四つの神域すべてに当てはまるわけで、これだけでは特に南の神域をラテン人にとっての共同の祭儀の場と断定することはできないが、祭壇群の存在と併せて考えると、その可能性を高めているような思える。

Castagnoli は、前4世紀末に祭壇の数が12基となったのは、当時存在した

ラテン人国家の数に対応しているのではないかと推測している(5)。事実 K. J. Beloch によると、かつてラティウムに存在した多くの都市国家は前350年頃までにローマのような有力な国家に吸収されて独立を失い、残ったのはローマ、ガビイー、ラビークム、ペドゥム、プラエネステ、ティーブール、ノーメントゥム、トゥースクルム、アリーキア、ラーヌウィウム、アルデア、ラーウィーニウムの12都市だった(6)。ただ、ラテン人戦争(前340～338年)のあと、これらの都市の多くは自治都市 *municipium* としてローマ国家に吸収され、ローマの同盟都市 *foederati* として残ったのはプラエネステとティーブール(Liv. VIII, 14, 9)、そして恐らくコラとラーウィーニウム(cf. Liv. VIII, 11, 15)にすぎない。従って、12基の祭壇を、神域が改修された時点でまだ独立を維持していたラテン人国家と結びつけることは出来ないだろう。むしろ、ラテン人戦争に勝利してラティウムに覇権を築き上げたローマが、政治的には解体してしまったラテン人同盟の記憶を宗教のレベルで残し、南の神域を、*municipia* 或いは *foederati* として自らの宗主権の下に入った共同体を自ら率いて祭儀を行う場に造り替えたのではないだろうか(7)。恐らく各都市がそれぞれの祭壇を持つようになったのは神域の改修に伴って導入された *novum* で、以前はそれぞれの祭壇で複数の都市の代表が供犠を行ったと考えられる。

第3章 註

1. ラテン人祭

(1) アウグストゥスの時代の古物研究者ウェッリウス・フラックスによると、ラティーンヌス王(ラテン人の祖)がカエレの王メゼンティウスとの戦争の時、姿を消してユピテル・ラティアーリスになったと伝える伝承があった(Festus p.212L)。

(2) RE XII, 1, 947sq. (M. Gelzer); Cornell (1955) 294sq. プリーニウス (n.h.3,69) は、*Feriae Latinae* で肉片を受け取った共同体のリストを伝えている。リストに挙がっているのは30の共同体で、ローマなど歴史時代に有力となる国は含まれていない。プリーニウスのリストは、恐らくラティウムの都市が形成される以前の、ラテン人が多くの小さな集落に分かれて住んでいた時代の状態を反映しているのだろう。歴史時代の *Feriae Latinae* はローマが主催し、祭の日も、ローマの最高政務官であるコーンスルが就任直後の公示している。

(3) ラテン人国家は前6世紀の終わりころまでには政治的・軍事的同盟(ラテ

ン人同盟)を形成する。この同盟は、恐らくは共同の祭儀を核とするラテン人国家の連合とは別もので、勢力を増大しつつあったローマに対抗するために結成されたと考えられる。集会の場所としてはアリーキアの近くのフェレンティーナの森 *lucus Ferentinae* が選ばれた。プリスキアーヌスは、カトーの『オリギネース』から以下の文章を伝えている (fr. 58 Peter)。「カトー・ケンソーリウスは同じ所 [『オリギネース』の第2巻] で: トゥスクルムの人エゲリウス・ラエウィウスは、ラテン人のディクタートル [ディクタートル・ラティーヌス] として、アリーキアの森の中でディアーナの杜を奉納した。以下の国民が共に [奉納を行った]: トゥスクルムの人々、アリーキアの人々、ラーヌウィウムの人々、ラーウィーニウムの人々、コラの人々、ティーブルの人々、ポーメーティアの人々、アルデアのルトゥリー」この断片は、元々の文脈から切り離されており、ディアーナ祭儀が始まった年代も歴史的背景も不明。「ディアーナ女神の杜」はネミ湖の北東の端に位置する。それに対しフェレンティーナの杜は、後にアッピア街道が通るコースの近くにあったと考えられている。それ故、カトーの断片はラテン人同盟の結成そのものを伝えているのではないだろう。しかしこの祭儀の創設において、ローマ人ではなくトゥスクルム人が主導的な役割を演じており、しかも奉納に加わった国民にローマが含まれていないことは、注目に値する (リストは恐らく完全ではないが、重要さの順に配列されている可能性はある)。多分これは偶然ではなく、ラテン人たちがローマを排除して新しい祭儀を奉納したのである。もしディアーナの杜の奉納がラテン人同盟の構成員を結びつけるために行われたとすれば、ラテン人のディクタートル (長官)はラテン人同盟の長官である可能性は十分ある。cf. Cornell (1995) 297sq. ルーキウス・キンキウス (RE III, 2, 2555 Nr. 3) は、フェレンティーナに集まったラテン人の命令を受けてローマ人が将軍を出したことを伝えているが (Fest. 276L)、これは恐らく前493年のカッシウスの和約で決められたのだろう。Cornell (1995) 299. Gelzer (RE XII, 1, 955sq. は別の解釈をする。

2. アプロディーシオン

(1) e.g. CAH VII, 2, 50 (M. Torelli). エトルーリア南部からラティウムにかけての海岸地域にいくつも存在したエンポリオンの神域で祀られていた女神 (ウェヌス=アプロディーテー、フォルトゥーナ、マテル・マトゥータ) に関しては、Cornell (1995) 109-112 を見よ。

(2) Castagnoli は、最初アプロディーシオンはラーウィーニウムとアルデアの二カ所にあるという説を支持したが (Castagnoli (1967) 245sq.)、数年後にはストラボが伝えるアルデアのアプロディーシオンをラーウィーニウムのアプロディーシオンの doublet と見なす解釈に傾き (Lavinium I, 110sq.)、結局は判断を保留するような言い回しをしている (Enea nel Lazio, 161sq. n. 14.)。G. de Sanctis ((1956) 199 et n. 138)は、ストラボの挙げる二つのアプロデーシオンを同一とする説 (Beloch (1883) 173n.) に従い、ラーウィーニウムとアルデアの確執と、アプロディーテー=ウェヌスの神殿の監督権の、アルデアによるラーウィーニウムからの奪取を考えたが、同じ『ローマ人の歴史』の第4巻では、「女神 (=アプロディーテー=ウェヌス) はラティウムに二つの古い、極めて重要な神域を持っていた。一つはラーウィーニウムの領域にあり、もう一つはアルデアの近くにあった・・・」(de Sanctis (1953) 154)と記している。

(3) Itinerarium Antonini, 301: Ab Urbe, Hostis XVI. Laurento XVI. Lanuvio XVI; Tab. Peut., VI,1: Laurento VI Lavinium XVII Antium. ウィークス・アウグスターヌス・ラウレンティウムの遺構は Castel Porziano の保有地内で見ついている。cf. Enea nel Lazio, 157.

(4) Carcopino (1919) 171-219. Laurentum は市民団の名称、Lavinium は都市の名と考える。

(5) RE XII,1, 1008sq. (Philipp). ウィークス・アウグスターヌス・ラウレンティウムは、オスティアとプラティカ・ディ・マーレの間の海岸近くにありストラボの言うラウレントウムではない。小川 (1994年) 502頁註44も参照のこと。

(6)ラウレントウムという言葉は、ラーウィーニウムの海岸を指すこともある。

(7) Ehlers (1949) 173 は、ラーウィーニウムがラティヌスの娘でアエネーアスの妻となるラーウィーニアに因んで名付けられたとすると、アエネーアスによる都市建設を告げる prodigia (補遺1を参照) からその実現までに時間がかかりすぎるので、アエネーアスにラーウィーニウムとは別の町を築かせるヴァージョンが生まれたと推測する。しかし Ehlers も記すように、ストラボが伝えるヴァージョンには prodigia は現れない。

(8) Castagnoli (1967) 238 は、ラーウィーニウムの建設されることになる丘とヘーリオス (ソル) の神域の間の距離としてディオニューシオス (I, 55, 2) が伝える24スタディオン (Castagnoli によると、4.262キロ) と、プラティ

カ・ディ・マーレからフォッソ・ディ・プラティカの河口近くに発見された神域までの直線距離（4. 150キロ）が一致することを、この神域をヘーリオスの神域に同定する根拠に挙げる。更に、この神域から現在の海岸線までの距離はおよそ500メートルで、ラウレントゥムに到達したアエネーアス一行が野営した場所から海までの距離としてディオニューシオス（I, 53, 3）が伝える約4スタディオ（=708メートル）と、ほぼ一致する（Castagnoli は、差異を海岸線の後退で説明する。p. 238 n. 7）。しかし実際には、ディオニューシオスは、豚が「海からおよそ24スタディオ行ったところで丘の上に駆け上がった」（I, 56, 2: ἡ μὲν ἀμφὶ τοὺς εἴκοσι καὶ τέτταρας σταδίου ἀπὸ θαλάττης διελθοῦσα λόφον τιὰ προσανατρέχει）と記しており、彼は24スタディオを海から丘の麓までの距離と理解していたことが分かる。彼はヘーリオスの神域を実際に訪れているので、この神域と海との位置関係は知っていたはずだが、恐らく彼の意識の中では神域と海岸は一つに結びついていたのであろう。しかも24スタディオという距離は彼が実際に測って得たものではなく、書物で読んだか土地の人に聞いたかして得た知識だと考えられる。それ故、Castagnoli の一見すると厳密な議論には、あまり意味を認めることができない。

(9) ウェルギリウス（Aen. VII, 25sq.）もアエネーアスをティベリウス川の河口でイタリア半島に上陸させている。ウェルギリウスがアエネーアスに築かせた新しいトロヤは、Carcopino によるとオスティアの前身で、このヴァージョンにはオスティアを拡張しようとしたアウグストゥスの政策の影響が認められるという（Carcopino (1919) 492sq.; 725sq.）。しかし、ウェルギリウスがアエネーアスをティベリス川の河口に上陸させたのは、詩人の空想の産物だと考える研究者も多い。cf. Castagnoli (1967) 240-2; Dury-Moyaers (1981) 90sq.

(10) Carcopino (1919) 235-40 は、ストラボンの文章（V, 3, 5）で、ὕπερκειται δὲ τοῦτων を漠然とした表現と捉え、その上で εἶτα Λαύρεντον を μετὰ Λαυρεντίων、μετὰ Λαυρεντίων、εἶτα Λαυρεντίνοι、εἶτα Λαυρέντιοι などに修正する。つまり、ストラボンはラーウィーニウムとアルデアの間にラウレントゥムという町が存在したとは考えていない、という主張なのだが、結論が先にあって、それに合うようにテキストを読み替えているような印象を与える。

(11) Lavinium I, 111.

(12) RE XXI, 2360 (Dahlmann); Brodersen (1994) 1sq.

(13) cf. n. h. I, indices auctorum.

(14) cf. RE XXI, 2398-2405.

- (15) Dury-Moyaers (1981) 196. 但しこれは、単に南の神域に言及する記述史料が現存しないまでのことで、南の神域がラテン人の共同の祭儀の場ではなかったと断定することはできない。この点で、私は Dury-Moyaers と意見を異にする。
- (16) 年代記の伝承の史実性を考古学史料によって立証しようとする試みの危うさに関しては、Holloway (1994) 7-11 の指摘を参照のこと。

3. 南の神域とラテン人同盟の祭儀

- (1) Pugliese Carratelli (1969) 73sq. 当時、第2章で指摘したように、このとき第13祭壇は放棄されていた。
- (2) Lavinium II, 441.
- (3) Dury-Moyaers (1981) 190-4 は、12基の祭壇を12柱の農耕神 (cf. Serv. ad Verg. G. 1, 21; Augustin. C.D. IV, 8; Varro rust. 1, 1) の祭儀に結びつける。しかし祭壇は最初から12基置かれていた訳ではない。Dury-Moyaers は勿論この事実を無視はしないが (Pugliese-Carratelli に対しては、前4世紀にもなってラテン人都市がギリシア神話そのままに12神に祭壇を奉納したとは考えがたい、と批判している)、12基の祭壇群になるまでの過程に関して、説得力のある説明をしていない。
- (4) Lavinium I, 102sqq.; Lavinium II, 5. Cornell (1995) 109 は、様式と年代の異なる祭壇が置かれている理由を、幾つかのラテン人の共同体が、それぞれ自分の祭壇を維持していたことに求めている。
- (5) Lavinium I, 102sqq.; Lavinium II, 5.
- (6) Beloch (1926) 165sq. 但し、Beloch が挙げるリストは確実ではない。例えば、トゥースクルムは前381年にローマに併合されたという伝承もある (Liv. VI, 26, 8)。他方、コラでは前一世紀の初頭あたりまで二人のプラエトルが統治しており (ILS 6131 cf. ILLRP 60)、4人役 (ILS 5772) は同盟市戦争のあとコラがムーニキピウムとなった時点で置かれたと想像しうる。また Salmon (1982) 5 は、前4世紀の半ばに独立を保っていたのは、20弱の都市だと考えている。
- (7) 小川氏もこの神域を、ラティウム諸都市の代表が集合し、定期的に何らかの宗教儀式を挙行了した場と考えている (小川 (1994年) 481~2頁)。

第4章 ローマの国家祭儀と南の神域

文献史料はラーウィーニウムの祭儀とローマの国家祭儀の緊密な結びつを伝えている。マクロビウスによると、命令権 *imperium* を有するローマの高等政務官は就任に際してラーウィーニウムに赴き、ペナーテース *Penates* とウェスタ *Vesta* に供犠を行ったという(1)。マクロビウスは、ラーウィーニウムで供犠を行ったローマの政務官として、コーンスル、プラエトル、ディクタートルを挙げる。王政が廃止された直後のローマを統治した政務官がどう呼ばれたのかという問題は置くとしても、コーンスルとプラエトルを並べて挙げている以上、マクロビウスは前367年の改革以降の状況を念頭に置いていたことは間違いない。他方ディクタートル職が置かれたのは前3世紀末までで、前2世紀を通じてこの職は用いられず、前1世紀になって再び現れた時には、その性格は前3世紀までのものとは大きく異なっていた。この単に共和政の原則を大きく逸脱した権力に合法的な装いを与えるためだけのディクタートル職も、カエサルの死後マルクス・アントーニウスによって廃止される (Cic. Phil. I, 3. cf. Cic. Phil. V, 10; Cass. Dio XLIV, 51, 2; Liv. ep. 116)。マクロビウスは直説法と接続法の現在形を用いており政務官のラーウィーニウム詣でが彼の時代の習慣であるかのような印象を与えるが、彼が思い描くのは前2世紀頃までの共和政最盛期の状況だと考えられる(2)。

ペナーテース (*dii penates*) (3)は、古代から伝わる語源的解釈によると *penus*、*penitus*、*penetralis* などのグループから派生した言葉で (Cic. N.D. II, 68)、この解釈は今日でも支持されている(4)。多くの研究者は *penus* を「食物の備蓄」の意味に理解し(5)、元来ペナーテースは家の貯蔵庫の守り神 (*Vorratsgötter*) だったが、*penates* という言葉が特定の神を指す固有名詞ではなかったため(6)、炉床に祀られていた家の守り神 (*Hausgötter*) も *penates* と呼ばれるようになったのだろうと推測している(7)。これに対し P.Boyancé は *penus* の元来の意味を「家の中で最も奥まった部分 (*partie la plus retirée de la maison*)」に求める A.Ernout と A.Meillet の語源辞典(8)に従い、ペナーテースは「家の奥まった所に住まう神」だったと考える(9)。つまり Boyancé によると *dii penates* はもともとから *Hausgötter* だった(10)。

ラーウィーニウムのペナーテースは、伝承によるとアエネーアスがトロヤからもたらした家の守り神だった (Verg. Aen. III, 148-50)。ワッローは、この神の起源をサモトラケー *Samothrake* に求め、ダルダノスによってプリュギア *Phrygia* (ここでは、トロヤを指す) へ運ばれたと伝える (Varro apud Serv. (Daniel) ad Verg. Aen. I, 378) (11)。

カッシウス・ヘミナによると、サモトラケーのペナーテースがテオイ・メガロイ *θεοὶ μέγαλοι*、テイオイ・デュナトイ *θεοὶ δυνατοί*、テオイ・クレーストイ *θεοὶ χρηστοί* などと呼ばれていた (Cassius Hemina apud Serv. (Daniel) ad Verg. Aen. I, 378)。サモトラケーはカベイロイ *Kabeiroi* の秘儀の中心地の一つで、その名声はヘレニズム時代に高まったが、碑文では、この神はカベイロイではなくテオイ・メガロイ *θεοὶ Μέγαλοι* と呼ばれている(12)。またサモトラケーのテオイ・メガロイ (カベイロイ) はディオスクーロイだという解釈が、前3世紀頃からギリシア人の間に存在していたらしい(13)。

ワッローを含む何人かの著述家は、サモトラケーの門の前に置かれていた2体の男性の神像が *Magni Dii* だと証言していた。これはカストールとポルルークスの像で、航行の守り神として崇められていたという (Serv. (Daniel) ad Verg. Aen. III, 12)。更にワッローは、ペナーテース像の台座に *MAGNIS DIIS* という銘が刻まれているとも記していたらしいが (Serv. ad Verg. Aen. III, 12)、これを伝えるセルウィウスの文章からは、ワッローがどこの像について言っていたのかは分からない。だが、ハリカルナッソスのディオニューシオスによるとローマのウェリアに鎮座していた「国家のペナーテース *Penates Publici*」は槍を握った2人の青年の姿を借り (Dion. Hal. I, 68, 2)、台座にはその神像がペナーテースであることを示す銘が刻まれていたというので、ワッローの言うペナーテース像はウェリアの像を指すと考えられる(14)。

ウェリアのペナーテースはラーウィーニウムから勧請された。ラーウィーニウムのペナーテースは、ウェリア以外に中央広場 *Forum* のウェスタの神殿でも祀られていたといわれる(15)。アウグストゥスの平和の祭壇 *Ara Pacis Augustae* を飾る「ペナーテースに供犠を行うアエネーアス」のレリーフは、岩の上にペナーテースの祠を描く。祠は4本の柱によって支えられ、側壁は長方形の石が

積み重ねられている。破風を持つ入り口に扉はなく、内部に安置された2柱の神の座像が見える(16)。ウェリアのペナーテースの祠と神像をモデルにしているのかもしれないが、レリーフの中で設定された場所はラーウィーニウムだろう。

ペナーテース祭儀に関しては、以上述べたようにペナーテースをディオスクーロイと同一の神像で祀る祭儀の他に、神像を伴わない祭儀があったことが知られている。ティーマイオスが証言するところによると (apud Dion. Hal. I, 67,4)、ラーウィーニウムの神域の最も奥まった所には、ペナーテースのご神体として鉄と青銅でできた使者の杖 κηρύκεια σιδηρά καὶ χαλκᾶと「トロヤの壺」と呼ばれる壺 κέραμος Τρωϊκόςが置かれていた。ローマにあるウェスタの神殿の奥まった場所に保管されていたペナーテースの聖物 *sacra* は、ガッリア人によってローマが占拠されたとき、小さな壺 *doliola* に納めて埋められた (Liv. V, 40,8)。この壺が埋められた場所は、後に *Doliola* と呼ばれるようになったという (Paul. Fest. 60L; Plut. Cam. 20, 8)。

こうした伝承から G.Wissowa は、もともとペナーテースとディオスクーロイの間には本質に関わる結びつきはなかったが、長らく無像で礼拝されていたペナーテースが、ギリシアの例に習って祭儀の像を得た時、ディオスクーロイがモデルとして使われたのだろうと推測した(17)。これに対し St. Weinstock は、南の神域で出土したディオスクーロイ碑文を基に、ラーウィーニウムのペナーテースはもともとタレントウムからもたらされたディオスクーロイだと主張する。

Weinstock によると、新たに出土した碑文により、南の神域ではティーマイオスより遙かに昔からディオスクーロイが祀られていたことが確かめられ、ペナーテースをディオスクーロイと同一の神像で祀る祭儀に関する伝承に信憑性があることが裏付けられた(18)。それではティーマイオスもまた、ペナーテース祭儀の名のもとにディオスクーロイ祭儀について語っている可能性はないだろうか？ここで Weinstock は、ギリシアにおけるディオスクーロイ祭儀の中心地だったスパルタとタレントウムでも、ディオスクーロイに二つのアンポラが奉納されていたことを窺わせる貨幣の図像やレリーフ、ディスクスがあること

に注目する。そしてこのアンポラはラーウィーニウムの κέραμος Τρωικόςおよびローマの *doliola* と同じものであり、元来ペナーテースは、実際にディオスクーロイだったという結論を導き出すのである(19)。

Weinstock は、ラーウィーニウムのディオスクーロイの起源をタレントウムに求めるが、早い段階でサモトラケのテオイ・メガロイの影響を受けたことも否定しない(20)。ローマにペナーテース祭儀がもたらされたルートとして、Weinstock は二つを考えているようである。先ず、直接ラーウィーニウムから双子神を象徴する壺がローマにもたらされ、ウェスタの神殿に安置された。ウェリアにペナーテースの神殿が建立されたのはこれより後のことで、その際トウスクルムのディオスクーロイの祭儀が何らかの影響を与えた可能性があるとして、Weinstock は指摘している。

こうしたペナーテースとディオスクーロイを同一視する説に対して、Chr. Peyré はローマ共和政末期の貨幣に描かれたペナーテースとディオスクーロイの図像が必ずしも同一ではないことに注意を促す(21)。つまり、ディオスクーロイは星（希望の印で救いの象徴）の付いたフェルト帽 *pileus* を被っているのに対して(22)、D(ei) P(enates) P(ublici)あるいは Dei Penates の銘が入っている貨幣には、一つの例外を除きこれらのアトリブートは描かれていないのである(23)。そしてこの観察結果をもとに Peyré は、ペナーテースとディオスクーロイとは異なったイコノグラフィーに従って描かれたと結論づける。更に Peyré によると、ペナーテースとディオスクーロイの間に混同がなかったことは、これ以外の理由からも推測がつく。つまり、CRR, No. 572 を発行したガイウス・スルピキウスの属するスルピキウス氏はラーウィーニウム起源であり、恐らく彼の発行したデナーリウスの図像は、このローマの宗教上の母市を暗示する。CRR, No. 971 を発行したガイウス・アンティウスに関しては、Peyré はアンティウス氏を同じくラーウィーニウム起源とする Babelon 説と、前46年にローマに帰還したカエサルがペナーテースに対して行った供犠と結びつける Grueber 説を挙げた上で、後の解釈を採っている。いずれにせよ彼らは、ローマのディオスクーロイの祭儀ともディオスクーロイの祭儀で名高いトウスクルムとも、何の関係もなかった(24)。こうした中にディオスクーロイ・タイプに P(enates) P(ublici)の銘を入れたマーニウス・フォンテーユスのデナーリウス (CRR, No. 566b) を置

いてみると、このタイプは孤立しており、歴史上のある時点でディオスクーロイにペナーテース・プーブリキーというエピテトンが付けられるようになったことは示しても、ペナーテースがディオスクーロイに同化した証拠とはならない、と Peyré は主張する(25)。

次に Peyré はセルウィウスとダニエルの古注がウェルギリウスの *Penatibus et Magnis Diis* (Aen. III, 12) に付した説明の検討に移り、ローマ人の間には二つの解釈が存在したと指摘する。つまり、(a)ペナーテースは *Dii Magni* であり、*Dii Magni* はディオスクーロイだという伝承と、(b)ペナーテースが *Dii Magni* と呼ばれたのは、ローマ人の宗教でこの神が占める重要さの故であり、ペナーテースと本来の *Dii Magni* の同一性を示すわけではないという解釈である。セルウィウスは(a)をワッローに帰しているが、Peyré によるとこれは明らかな誤り。『ラテン語について』から知りうるようにワッローは、*Dii Magni* は男女の神であって、それ故にカストルとポッルークスではありえず、同じ理由からペナーテースでもないと考えていた(26)。この解釈はサモトラケーの秘儀の教えと神官の書(アウグレースの書 *augurum libri*)に基づき、公式で正真のものである。これに対して一般の人々は (*ut uolgens putat*)、サモトラケーのカストルとポッルークスと、*Dii Magni* を同一視していた(27)。

つまり Peyré によると、ペナーテースとディオスクーロイは別の神であり、国家祭儀は両者に対する祭儀をはっきりと区別した。しかしウェリアの祠のペナーテース像がディオスクーロイと同じく二人の若者の姿をしていたこと、鎮護国家を司るペナーテース・プーブリキーの役割は、保護と救いを司るディオスクーロイの役割に類似していること、ペナーテースという言葉は漠然としており、同じように保護を行う他の神に容易に転化しえたことなどが要因となって、ディオスクーロイが人々のあいだでペナーテース・プーブリキーと呼ばれるようになり、この混同が、ディオスクーロイとペナーテースの図像を区別して描く貨幣にも時として影響を与えたのである(28)。

Peyré は、アーケイック期ローマの宗教でペナーテースがディオスクーロイと同一視されていたことの論拠を *dolium/amphora* に求める Weinstock の議論を薄弱だと言って一蹴したが(29)、N.Masquelier は Weinstock の議論を踏襲し、ラ

ーウィーニウムの κέραμος τρωικόςとローマの *dolia* はタレントウムやスパルタの *amphorae* に対応することを認めている。そして、碑文から前5世紀にはラーウィーニウムでディオスクーロイが祀られていたことが証明されているので、ペナーテースとの同化もこの頃から起こったと考える(30)。私は、G.Dumézil の3機能論に立脚する Masquelier の議論(31)を全てに亘って受け入れることには躊躇いを感じるが、セルウィウスのテキストに関するコメントは、正鵠を得ているように思える。つまり Peyré の主張を認めれば、現在では散逸してしまっ、わずかに断片だけが引用で伝わる古代の作品のすべてについて、引用の正しさを疑わなければならなくなるか、もしくは、研究者が恣意的に判断してしまう恐れが生じだろう。むしろ私たちは、一見したところ矛盾するワッローの断片のどちらが正確な引用かを問うのではなく、ワッローはこの問題に関して二つの異なった説を記していた、と考えた方がよいだろう(32)。

ワッローが『ラテン語について』で記していることも分かりにくい、恐らくここで彼の念頭にあったのは *dii principes* としての *Caelum* と *Terra* だろう。これは男女二体の神で、エジプト人が *Serapis* と *Isis* と呼び、ラティウムでは *Saturnus* と *Ops* と呼ばれるものに同じである。*Caelum* と *Terra* は *dii principes* の意味で *dii magni* と呼ばれる(33)。サモトラケーの門の前に置かれた二体の男性の青銅像も、カストルとポッルークスと呼ばれるサモトラケーの神も一般の人々は *dii magni* と呼んでいるが、これらは *dii principes* ではない。*dii principes* は男女の神であり、サモトラケーの人々が「テオイ・デュナトイ」と呼ぶのに対応して、『アウグレースの書』は強力な神 (*divi qui potes*) と記している。ワッローの主張は、おおよそこのようなものだろう。つまり、ワッローは単にサモトラケーで祀られていた二体の男性神が *dii principes* であることを否定するにすぎないと私は理解する。

次に貨幣の図像にもどる。Peyré は無視しているが、恐らくフォンテーユス氏はトゥスクルム起源(34)。Crawford は、ガーユス・フォンテーユス(マーニウスの兄か従兄弟)のデナーリウス(No. 290,1 = CRR, No. 555)の表側に描かれたヤーヌス形頭像をディオスクーロイに解釈し、テーマ選択の動機を、マーニウスのデナーリウスに描かれたディオスクーロイ像(CRR, No. 566; 566a)と同様に、フォンテーユス氏のトゥスクルム起源に求めている(35)。マーニウス

は、同じディオスクーロイ・タイプの一つに PP の銘を入れ (CRR, No. 566b)、描かれたディオスクーロイ像がペナーテース・プーブリキーであることを示した。Crawford によると、前137年から前109、8年に発行された貨幣は、描かれた像を同定する目的で銘が用いられており(36)、マーニウスのやり方が特殊だったわけではない。Crawford は、ガーユス・スルピキウスのデナーリウス (CRR, No. 572) とガーユス・アンティウスのデナーリウス (CRR, No. 971) のペナーテース・プーブリキーを、造幣官の *origo* に言及するグループに含めている(37)。トゥスクルム起源のフォンテーユスは、恐らくトゥスクルムで祀られているディオスクーロイを貨幣の図像に選び、同じ打ち型に PP の銘を入れてペナーテース・プーブリキーの像としたのだろう。他方ラーウィーニウム起源の2人の造幣官はペナーテースを貨幣の図像として選び、彼らをディオスクーロイの姿で描いたが、ディオスクーロイのアトリブートまでは描かなかった。これは、描かれた像の同定は銘でもって十分に可能だった為かもしれない。

何故マーニウス・フォンテーユスはディオスクーロイをペナーテース・プーブリキーとして描こうとしたのか、その理由は分からない。ただフォンテーユスのデナーリウスが発行されたのは、Sydenham によると前103年頃、Crawford はこれを前108年か7年に置いている。他方スルピキウスのデナーリウスは、Sydenham によると前103/2年頃、Crawford によると前106年に発行された。このように2人の造幣官が極めて近接した時期に同じペナーテース・プーブリキーをデナーリウスの図像に選んだのは、何かしら同時代の出来事と結びついていると考えられる。スルピキウス氏のラーウィーニウム起源は、ガーユス・スルピキウスのデナーリウスが表面にペナーテース・プーブリキー、裏面にラウレントゥムの豚の伝説(38)を描くことに、タキトゥスの「(プーブリウス・スルピキウス・) クイリーニウスは古いパトリキーのスルピキウス氏とは無関係で、自治都市ラーヌウィウム近郊の出だった」(ann. III, 48) という証言を結びつけて推測されたにすぎない(39)。もしスルピキウスのテーマ選択の理由が同時代の出来事にあるとすれば、スルピキウス氏のラーウィーニウム起源は根拠の極めて薄弱な仮説になってしまう。ガーユス・アンティウスのデナーリウスに関しては、ペナーテース・プーブリキーの図像が選ばれた理由を Peyré 自身がアンティウス氏の起源よりもカエサルがペナーテースに対して行った供犠に求めている。

私は、ディオスクーロイとペナーテース・プーブリキーが同じ図像で描かれたこと、ペナーテース・プーブリキーの象徴として2個の壺 (*dolium*) が用いられ、ディオスクーロイが2個のアンポラで象徴されたことから、遅くとも前2世紀の終わり頃までには、ローマ人はディオスクーロイとペナーテースを本質的に同じ神と理解するようになっていたと考える。ただこれをペナーテース・プーブリキーと呼ぶか、それともカストルとポッルークスと呼ぶかの間には、単なる呼称の違いを超えた違いがあったらしい。つまり、アエネーアスがトロヤからもたらしたのはディイー・ペナーテースであり、レギッルス湖畔の戦いでローマの騎士を助けたのはカストルとポッルークスだった。しかし両者は同じ神に理解されていたのである。

本来どうだったかについては議論が分かれるにしても、ローマ人がペナーテース・プーブリキーをディオスクーロイを重ね合わせてイメージしていたことは確かなように思われる。だとすれば、ディオスクーロイへの奉納を記す碑文が出土した南の神域は、ローマの政務官がペナーテースに供犠を行った神域の有力な候補だろう。しかし **Castagnoli** は、アントニーヌス・ピウス帝のメダヨンを引いて、ローマの政務官が訪れたペナーテースの神殿はラーウィーニウムの市壁の中にあつたと主張している(40)。**Castagnoli** の引くメダヨンは、市壁の内部に30匹の子に乳を吸わせる豚とアンキーセースを肩に担ぐアエネーアス、そして円形の建物を描く(41)。追補1で述べるように、メダヨンのモチーフはラーウィーニウムの建設伝説から取られており、描かれた市壁はラーウィーニウムの市壁だろう。そして円形の建物はローマのフォルム・ローマーヌムの神殿から推して明らかにウェスタとペナーテースの神殿と考えられることから、**Castagnoli** はこの神殿をローマの政務官が供犠をおこなった場と想像するのである。更に **Castagnoli** は、南の神域の祭壇が前2世紀の前半には放棄されたことも、ここがローマの政務官がペナーテースに供犠を行った場ではないことの理由の一つに数えている。

この **Castagnoli** の反論に対しては、陳腐ではあるが、やはりアウグストゥスの平和の祭壇 *Ara Pacis Augustae* を先ず挙げなければならない。既に述べたように、祭壇の正面の壁に刻まれたこのレリーフは、後にラーウィーニウムが立てられることになる場所で供犠を行うアエネーアスを描くが、その背景には方形

の大理石を積み重ねた神殿が配置され、中にはウェリアの神殿の本尊同様に槍を持った二人の青年の座像が見える(42)。もちろん、このレリーフがラーウィーニウムのペナーテースの神殿をどれ程正確に再現しているかは分からないが、少なくとも、ラーウィーニウムにはローマと同様にペナーテースを祀る神殿が二つあった可能性は排除できないだろう。南の神域の祭壇が前2世紀の前半には放棄されたことは発掘の状況から疑えないが、祭壇の使用が停止されたあと、ローマの政務官が供犠を行う場が市中に移されたことも考えられる。更に、帝政期になってもローマの政務官が毎年規則的にラーウィーニウムを訪れ、ウェスタとペナーテースに供犠を行いつづけたかも分からない(帝政期については、断片的な情報しかない)。こうしたことを考えると、アントニーヌス・ピウスのメダヨンを、ローマの政務官がラーウィーニウムの市壁の中で(のみ)祭儀を行った証拠として用いることはできないように思われる。

第4章 註

(1) *Macrob. Sat.* 3,4,11: *eodem nomine appellavit et Vestam, quam de numero Penatium aut certe comitem eorum esse manifestum est, adeo ut et consules et praetores seu dictatores, cum adeunt magistratum, Lavinii rem divinam faciant Penatibus pariter et Vestae.* 政務官職を辞した際や、属州に赴任する際にも供犠を行ったことが伝えられている。cf. *Serv. ad Verg. Aen.* II, 296; III, 12; *Val. Max.* I, 6, 7; *Schol. Veron. ad Verg. Aen.* I, 259 (神祇官 *pontifices* が毎年コーンスルとともにアエネーアス・インディゲスの神殿を訪れ、供犠を行った)。

(2) 但し、マルクス・アウレリウスはマルコマンニーとサルマタエに対する勝利を凱旋式で祝ったあとラーウィーニウムに赴いたと伝えられるように(*H.A. M. Ant. Phil.* 27, 4)、帝政期にも例がない訳ではない。

(3) 私は便宜上「ペナーテース」と呼ぶが、*penates* が単独で用いられることはほとんどない。また単数形を取ることもない。cf. *Wissowa* (1912) 162; *RE XIX*,1, 418 (*St. Weinstock*); *Radke* (1979) 247.

(4) *Wissowa* (1912) 162sq.; *RE XIX*,1, 417-25; *Bömer* (1951) 52sq.; *Latte* (1960) 89; *Ernout-Meillet* 496 (s. v. *penus*).

(5) “*der Vorrat an Speisen und Lebensmitteln, der Mundvorrat usw.*” (*Georges*); “*Food, provisions (esp. as the stock of a household)*” (*Oxford Latin Dictionary*).

(6) *penus* の語幹に、帰属を表す接尾語-as (cf. *nostras*) が付いたと考えられる。

(7) *Wissowa* (1912) 161sq.; *Bömer* (1951) 53sq. cf. *Serv. Aen.* II, 514: *Penates sunt*

omnes dii qui domi coluntur. Wissowa と Bömer では、元来ローマ人の家で貯蔵庫があった場所に関する理解が異なり（炉床と同じくアトリウムにあったと考えるか、別の棟だったと考えるか）、それが「貯蔵庫の守り神」と「家の守り神」の関係に関してもイメージの違いを生んでいる。

(8) Ernout-Meillet 496. 論拠は Fest. 296L.

(9) Boyancé (1952) 112sq.

(10) Boyancé は penates に含まれる接尾語-as を「～の中に住まう（者） qui <réside dans>」の意味に解釈するので、もし penus が「食料の備蓄」なら、penates は「備蓄を守る神」というより、単に「備蓄に住まう神」の意味になって何のことも分からなくなると言って通説を批判する。

Radke (1979) 249sq. は penus を「家長と彼の客人が使うことを見越して蓄えられたすべての備蓄品」を指す言葉と捉え、potis や potestas に共通する語幹*pot-に-n-を介して接尾語-es が付いて出来たと考える（先ず母音交換により語幹の母音(o) が消滅し、次いで無音化した破裂音(t) が脱落したあと、n が母音化した：*pot-n-es > *ptnes > pntes / penes > penus)。Radke の解釈は、言語学的には可能かもしれないが、いささか思弁的に過ぎるように思える。勿論、penates の語幹として*pot-を想定すると、ペナーテースが θεοὶ δυνατοί（力ある神）と呼ばれていた（後述）理由を説明するのに好都合だが、ローマ人が penates が potis や potestas と同じグループの言葉だと感じていたかどうかは疑わしいし、Radke も penates の語源と人々がこれらの神々をどうイメージしていたかは別の問題であることを認めている（S. 250）。

(11) 伝承はペナーテースの起源を等しくサモトラケーに求めるが、それがイタリアにもたらされた経路に関しては、二つの説が伝わっている。一つはアエネーアス自身がサモトラケーから運んできたという説（Serv. ad Aen. III, 12 (Daniel)）で、もう一つは本文で述べた説である。Masquelier (1966) 94 によると、前者はサモトラケーとローマの間の血縁関係を示すという政治的な目的で作られた伝説で、その成立は遅い（Masquelier は J. Perret (Les origines de la légende troyenne de Rome, Paris 1942) の説に従うが、Perret の著作は未見)。後者は、ローマのペナーテースがサモトラケーの神であり、アエネーアスがイタリアにもたらしたトロヤの神でもあることを説明するために考え出された（Masquelier (1966) 95. 同様に Perret の説に従う）。

(12) Nilsson (1967) 670.

- (13) RE X,2, 1444sq. s. v. Kabeiros und Kabeiroi (O. Kern). Nilsson ((1974) 102 は、カペイロイとディオスクーロイの混同が起こったのは前2世紀のことだとしている。共和政末期のローマの貨幣はペナーテースを一見したところディオスクーロイと同じ図像で描いている。例えばマーニウス・フォンテーユスのデナリウス (CRR, No. 566; 566a と 566b) を見よ。この問題に関しては後述。
- (14) MAGNIS DIIS の銘に加えて PENATIBUS (PUBLICIS)の文字が刻まれていたのか、それとも、Dii Magni 即 dii penates と理解されたのかは不明。
- (15) Radke (1979) 251 は、ラーウィーニウムのペナーテースがローマに勧請されたという言い伝えはないし、ローマの政務官がペナーテースに対して供儀を行うためにラーウィーニウムに赴いたことからそうした事実はなかったことが分かれると主張する。Radke によると、ウェリアの祠はラーウィーニウムのペナーテース神殿の分社にすぎず、ウェスタの神殿にはペナーテースは祀られていなかった (Radke は A. Brelich, *Vesta* (Zürich 1949) 81sq. を引いているが、Brelich の著書は未見)。
- (16) Weinstock (1960) pl. XIII, fig. 1.
- (17) Wissowa (1912) 165.
- (18) Weinstock (1960) 113.
- (19) Weinstock (1960) 114: The conclusion is that originally the Penates were in fact the Dioscuri. 南の神域からディオスクーロイ碑文が出土する以前は、Weinstock もディオスクーロイとペナーテースを元来は別の神格とみなし、ウェリアの神殿はトゥスクルムのディオスクーロイ神殿の分社だったが、前3世紀までにペナーテースが父祖の神 (πατρῶοι θεοί) としてディオスクーロイの姿でイメージされるようになると、ウェリアの神殿もディー・ペナーテースの神殿 (aedes deum penatium) と呼ばれるようになった、と考えていた。cf. RE XIX,1, 449sq.
- (20) Weinstock, (1960) 114 n. 34.
- (21) Peyré (1962) 443-52.
- (22) フェルト帽を被らない場合でも、星は描かれる。Peyré (1962) 443. 但し、同じくディオスクーロイを重なり合った頭部プロフィールで描く青銅貨 (semuncia. CRR, No. 136) では、2人は月桂樹の冠で縛ったフェルト帽を被っているが、星は添えられていない。Crawford (1983) 188sq.によると、このタイプは前211/10年にルーケリア Luceria で発行された。卵を半分に切ったような形のフェルト帽がディオスクーロイのアトリブートとなるのは前4世紀

末のこと。cf. RE XX 2, 1331sq. (s.v. πῖλος)

(23) CRR, No. 572; 971. 例外は、CRR, No. 566b (No. 566 タイプの図像に、P(enates) P(ublici)の銘が入る)。Masquelier (1966) 97 は E.Babelon, *Monnaies de la République romaine*, Paris 1885, I, 155; 503; II, 471 を引いて No. 572 と 971 のペナーテースの額の上に星が輝いているように言うが、写真で見る限り星は認識できない。

No. 572 の銘 DPP は、D(e) P(ecunia) P(ublica)と読む人もいるが、D(ii) P(enates) P(ublici)の読みの方が良い。論拠は Peyré (1962) 447-9 を見よ。同様に、No. 566b の PP も P(ecunia) P(ublica)ではなく、P(enates) P(ublici)の読みを取る。Crawford (1971) 153sq. は、フォンテーユスのデナーリウス貨幣の中で表に PP の銘の入ったものだけが裏に *dolium* (トロヤからイタリアに *sacra* を入れて運んだと言われる瓶) を描くことを指摘して、PP を *Penates Publici* と読む。

(24) Peyré (1962) 450. スルピキウス氏の一員が前 43 年頃にディオスクーロイ・タイプのアウレウス (CRR, No. 1081) とデナーリウス (CRR, No. 1082) を発行しているが、これはラーウィーニウムのペナーテース祭儀とトゥスクルムのディオスクーロイ祭儀の混同を証明するものではなく、前 374 年にトゥスクルムをラテン人の攻撃から救った *Ser. Sulpicius* の武勲を暗示するにすぎない。Peyré, loc. cit.. これに対し、ディオスクーロイを貨幣の図像に選んだ造幣官たちは、トゥスクルムのカストルとポッルークス祭儀に関係するテーマを取り上げることによって自らの氏族の称揚を目指した。Peyré (1962) 445sq. *gens Fonteia* (CRR, No. 566 et 566a) はトゥスクルム起源。cf. *Cic. Font. 41. gens Cordia* (CRR, No. 976 et 976 a, b, c) も恐らくトゥスクルム起源。RE, IV, 1, 1221, s. v. *Cordius* (2).

(25) Peyré (1962) 51. Peyré によると、ペナーテースがアイデンティティーを失ったのではなく、むしろペナーテースがディオスクーロイのアイデンティティーを浸食して行ったと考えている。因みに Peyré は、南の神域で出土したカストルとポッルークスへの奉納碑文をラーウィーニウムで双子神がペナーテースと肩を並べる存在だったことの証拠とはみなさない (p. 451)。

(26) Varro, L.L. V, 10, 58. 但し、Peyré はワッローが「*Dii Magni* はペナーテースでない」と明確に言っているわけではないことは認める。

(27) Peyré (1962) 453sq.

(28) Peyré (1962) 456-61.

(29) Peyré (1962) 455.

(30) Masquelier (1966) 91. Crawford (1971) 153sq.は、表にペナーテースの頭部プロフィールを持つフォンテーユスのデナーリウス貨幣の裏に *dolium* が描かれ、それ以外にも幾つかの貨幣で2個の *dolia* が現れることから、同じく2個のアンポラに象徴されるディオスクーロイとの混同が前2世紀の末頃に起こったと考える。

(31) Masquelier は、ラーウィーニウムでは双子神（ペナーテース）は豊饒の神として祀られていたと考え、ディオスクーロイとの同化の説明もこの第3機能の枠内に求めている。

(32) Masquelier (1966) 95sq.

(33) Masquelier, loc. cit. もこの *magnus* を *primordial = princeps* の意味に解釈する。

(34) Taylor (1960) 214.

(35) Sydenham はこれを *Fons* 或いは *Fontus* の像を解釈するが (CRR, No. 555)、*Fontus* という神の存在は疑わしい。Arnobius の写本に *patrem Fonti* (3, 29) の形で現れるのが唯一の証拠だが、Latte (1960) 77 n. 1 は語末の *s* の脱落 (*patrem Fonti<s>*) を疑う。

(36) Crawford (1974) 724.

(37) Crawford (1974) 728 n.4. cf. op. cit. 320; 470sq.

(38) この伝説に関しては、追補1で論じる。

(39) cf. RE IVA, 731 (Münzer). ラーヌウィウムとラーウィーニウムはしばしば混同された。ただタキトゥスの証言は、パトリキー系のスルピキウス氏の起源について何も語っていない。

(40) Lavinium I, 109; 115

(41) Lavinium I, 79, Fig. 82.

(42) 註(16)を参照。

補遺1 ラーウィーニウムとアエネーアス伝説*

ハリカルナッソスのディオニューシオスは、ラーウィーニウムの建設に関して次のような話を伝えている。トロヤが陥落したあとイタリアまで落ちのびてきたアエネーアスは、ラウレントウムの海岸で子を孕んだ雌豚を犠牲に捧げようとした。しかし豚は逃げ出し、岸から離れた丘で30匹の子を生む。神意を悟ったアエネーアスは豚が子を生んだ場所に都市を建設し、これをラーウィーニウムと名付けた。「ラウレントウムの豚」の予兆は、それからちょうど30年後にアエネーアスの子アスカニウス＝ユールスがアルバーヌス山に白く長い都アルバ・ロンガ *Alba Longa* を建設したことで成就したという (Dion. Hal. I, 56;66)。アウグストゥスの時代の詩人ウェルギリウスも、白い豚が30匹の白い子を産んだあと、オークの樹の下にうずくまってこれに乳をやったと歌っている (Verg. Aen. III, 389sq.; VIII, 31sq.)。

アエネーアス、30匹の子を生んだ雌豚、予兆の解釈の三つは、既に紀元前4世紀の終わり頃には一つの伝承群を形成していたらしい。リュコプローンは『アレクサンドラ』の中で、豚が生んだ子の数(30)をアエネーアスがアボリギネースの地に築くであろう砦(都市)の数に関係づけ、更に、アエネーアスがこれらの砦の一つに母豚と子豚の青銅像を置くであろうこと、またアテーナー女神のために神殿を建立して(1)、トロヤから持ってきた父祖の神々(ペナーテース)の像を安置するであろうと、カッサンドラの予言に託して語っている (vv. 1253sq.)。もしリュコプローンがこの部分をティーマイオスの『シケリア史』に依拠して書いたとすれば(2)、これが「ラウレントウムの豚」伝説の現存する最古のヴァージョンということになる。リュコプローンは、アエネーアスが青銅の豚の像を置き、アテーナーの神殿を建立することになる砦の名前を伝えていないが、ティーマイオスは、アエネーアスがトロヤから持ってきたペナーテースはラーウィーニウムに置かれている、と記していた(3)。また共和政末期の政治家で古代学者のワッローによると、当時もなお青銅で創られた母豚と子豚の像が公の場所に置かれており、神官が塩水の中で保存された母豚の体を(参詣者に)見せていた (rust. II, 4, 18)。ワッローは、豚が乳房の数以上の子を産むと、それは予兆だ、と言い、その最古の例としてこの伝説を挙げている。彼の伝えるヴァージョンでも、子豚の数はアルバ・ロンガが建設される

までの年数を表している (rust. II, 4, 17. cf. L.L. V, 32, 144)。

リュコプローンは伝説上の母豚を”συὸς κελαινῆς”と呼ぶ (v. 1256)。G. W. Mooney は”κελαινής”を”furiousae”、”horrendae”の意味に解釈し、リュコプローンの言い回しを”of the wild sow”と訳しているが、”κελαινός”の本来の意味は「黒っぽい」であり、リュコプローンの詩でもこの意味で使われていると考えて不都合はない(4)。しかもリュコプローンによると、子豚の数はアエネーアスがアボリギネースの地に築く砦の数を予告するので、この詩にはラウレントウムの豚がアルバ・ロンガの建設と結びつくよりどころは一切なく、リュコプローン (ティーマイオス) はラウレントウムの豚をアルバ・ロンガ建設の予兆とする伝説を知らなかった可能性が高い(5)。

他方、ラウレントウムの豚とアルバ・ロンガ建設との結合は、現存の史料を遡る限りローマで最初の歴史家ファビウス・ピクトル (fr. 4 Peter) に始まるが、そこではラウレントウムの豚とラーウィーニウム建設の関係は否定されている。つまり、アエネーアスは予言に従って豚が子を産んだ場所に都市を築こうとしたが、夢の中で30年待つように忠告され、企て (ラーウィーニウムの建設) を思いとどまったというのである(6)。

ラウレントウムの豚の話は、幾つかの要素が絡み合っただけで出来上がったと考えられる。先ず、豚が新しい都市が建設されるべき場所まで人々を先導したという話。イタリキーの都市建設伝説では動物 (キツツキやオオカミ) がしばしば先導者として現れるが(7)、ラウレントウムの豚も同様の役割を演じており、この部分が伝説の最古の層であろう。

次に、ラウレントウムの豚が生んだ子の数30は、リュコプローンの『アレクサンドラ』ではアエネーアスがアボリギネースの地 (ラティウム) に築くであろう砦 (都市) の数を予告すると解釈され (l'interpretazione topografica)、ファビウス・ピクトルの史書では、アルバ・ロンガが築かれるまでの年数を予告すると解釈されている (l'interpretazione chronologica) (8)。プリーニウス (n. h. III, 69) は、モーンス・アルバーヌスで供犠の肉片を受け取ったラテン人国家 (populi Albenses) として30の名を挙げる。またリーウィウス (II, 18, 3) は、ポスト

ウムス・コミニウスとティトゥス・ラルキウスがコーンスルの年（前501年）に30のラテン人都市がローマに対抗して同盟を結んだと伝え、ハリカルナッソスのディオニューシオス（V, 61, 3）は、ティトゥス・ラルキウス・フラウウスとクウィーントゥス・クロエリウス・シクルスがコーンスルの年（前498年）に、同盟を結んだ29のラテン人国家のリストを伝えている(9)。ラウレントゥムの豚が生んだ子の数は、かつて共通の祭儀の周りに集まるのを常としたラテン人国家の数、或いは、ローマに対抗して結ばれた政治的な同盟に加わったラテン人国家の数の記憶から30となったと考えられる(10)。このヴァージョンは、元来は宗教的な連合あるいは政治的な同盟の結束を表現するものだったとしても、容易に一つの国の宗主的な地位（1+30）を根拠づけるものに転化しえたであろう。

恐らく *l'interpretatione chronologica* は、30という数字の存在を前提としている。しかもこの解釈は、アルバ・ロンガの建設をアエネーアス伝説と結びつける一方で、アエネーアス自身がアルバ・ロンガの建設者であることは否定する。アルバ・ロンガは伝説の中で存在が伝わる有力なラテン人都市で、ローマが勃興する以前はラテン人都市同盟の盟主としてラティウムに覇をとっていたと言われるが、ローマに破壊され歴史時代にはもはや存在していなかった(11)。ローマで本格的な歴史記述が始まるまでこの都市の記憶は、祖国の滅亡後にローマに移住したと言われるアルバ・ロンガ系の貴族を中心に口承されていたのだろう(12)。

ラウレントゥムの豚の伝説を構成する三つ目の要素はアエネーアスである。エトルーリア南部では、アエネーアスのトロヤ脱出を描く陶器やスカラベ、それにテラコッタの小像が多数出土しており、前6世紀の終わり近くからアエネーアス伝説が知られていたことは確かである(13)。Vulci など幾つかのエトルーリアの都市では、アエネーアスが都市建設者として祀られていたと推測する研究者もいるが(14)、アエネーアス伝説のモチーフが現れる期間は限られており、エトルーリア人がアエネーアスに関心に向けたのは、一時的な流行にすぎなかったのかもしれない(15)。アエネーアス伝説がどのような経路でラテン人の間に伝わったのかに関しては、いまだ定説がない。以前はエトルーリア経由が考えられたが、最近では、ラティウムにおける発掘調査が進むに従って南

イタリアのギリシア世界との関係が見直され、アエネーアス伝説のラテン世界への伝播もその中で考える研究者もいる(16)。

リュコプローンの『アレクサンドラ』で、カッサンドラがアエネーアスにより築かれるであろうと予言する30の都市は、その一つに青銅の豚の像が置かれ、トロヤからもたらされたペナーテースの像が安置されることを除けば、つまり宗教上の宗主権が認められることを除けば、すべて対等の関係にあるように見える。このヴァージョンは、ラティウムにおけるローマの覇権が確立する以前に、ラテン人国家がラーウィーニウムを共同の祭儀の場とする連合を作っていた時代の記憶を留めるのか？それとも、ラティウムにローマの覇権が確立する前338年以降に、この覇権をラーウィーニウムの祭儀を用いて宗教のレヴェルで正当化する試みに伴い作られたのか？ひょっとしたら、その両方の要素を含むのかもしれない。

ファビウス・ピクトルとともにローマでも本格的な歴史記述が始まると、アエネーアス伝説とローマ建国との時間的矛盾に気がつかれ、この矛盾を何らかの方法で除去する必要が感じられるようになったと考えられる。従って、ローマの年代記にアルバの王のリストが取り込まれた理由をこの視点から説明する仮説には説得力がある(17)。その際、アルバ・ロンガの建設もまた運命によって定められていたことを示すためにラウレントゥムの豚の伝説が利用されたのではない(18)。それと同時に、アルバという名称からの連想で、豚の色が白に変えられたのだろう。最初はファビウス・ピクトルが行ったように、この伝説をラーウィーニウムの建設から解き放して、アルバ・ロンガとのみ結びつけられたが、後世の歴史記述ではラウレントゥムの豚の予兆を両方の都市の建設に関係させるヴァージョンが支配的となった(19)。

補遺1 註

*補注1は、毛利(1990)中のIV(44~7頁)を大幅に書き換えたものである。

(1) cf. Enea nel Lazio 160; 187sq.

(2) Beloch (1926) 179; Fraser (1972) 764 et 1065sq. n. 331; Dury-Moyaers (1981) 68 et n. 188. cf, RE XIII, 2338 (K. Ziegler). ただし、単にティーマイオスの史書を

韻文に書き直したのではない。またティーマイオス以外の資料も併せて使っている可能性もある。この意味で Jacoby, FGrHist (Text) 528; FGrHist (Noten) 312 n. 14 は、「リュコプローン、即ちティーマイオス」といった言い方はしてはならないと指摘している。なお『アレクサンドラ』の製作年代、および『アレクサンドラ』の著者と悲劇作家のリュコプローンは同一の人物かの問題には、ここでは論じる必要はない。Galinsky (169) 141sq.は慎重。

(3) Dion. Hal. I, 67,4. cf. de Sanctis (1953) 251; Ehlers (1949) 167.

(4) Mooney (1921) 135. Schilling (1979) 405sq.は”de couleur sombre”と訳し、リュコプローン（ティーマイオス）は青銅の豚の色を物語りの中に投影したと説明する。

(5) cf. Ehlers (1949) 167; de Sanctis (1956) 198sq. アギュリウムのディオドーロス (VII, 5, 3) によると、アルバという名称をティベリス川の古称に由来させる解釈が存在した。cf. Liv. I, 3, 5 (Albula); Varro, L. L. V, 30.

(6) Alföldi (1965) 274sq.; Gruen (1992) 32sq. Alföldi は、豚は元来アルバ・ロンガの建設伝説を構成する要素だったと考える。他方 Galinsky は、現存する断片が乏しいため、アエネーアスによるラーウィーニウム建設をファビウス・ピクトルが語っていた可能性は排除できないが、いずれにせよファビウスの伝えるヴァージョンでは、豚に導かれたアエネーアスが到達したのはラーウィーニウムではなくモーンズ・アルバーヌスであり、このことは重要だと主張する。cf. Ehlers (1949) 168.

(7) Alföldi (1965) 275; CAH VII, 2, 284 (T. J. Cornell). 但し、Ehlers (1949) 167sq. は、リュコプローンが伝えるヴァージョンでは豚は先導者の役を演じていないと指摘。この詩の中でラーウィーニウムを建設すべき場所を示したのは Tischprodigium (アエネーアスの一行はテーブルを食べた場所で旅は終わるという予言)。ただリュコプローンの言い回しは極めて簡略で、また Ehlers が主張するほどに明瞭ではない。この問題は、小川 (1994年) 483頁でも論じられている。

(8) タームは、Sordi (1960) 168sq.から借用。

(9) 恐らく一つの名が脱落し、国家の数はこのリストでも元来は30だったと考えられる。cf. Ogilvie (1965) 280.

(10) Ehlers (1949) 166sqq. (non vidi); Sordi (1960) 169 n. 1; Ogilvie (1965) 280sq.

(11) 多くの研究者は、これを Castel Gandolfo に同定している。cf. OCD (3rd ed.) 50; CAH VII, 2, 65.

(12) アルバ・ロンガから移住してきてローマのパトリキーに加えられた氏族のリストをリーウィウス (I, 30, 1; cf. Dion. Hal. III, 29, 1) は伝えている。

(13) cf. Bömer (1951) 14-8; Schauenburg (1960) 176-91 et Tafeln VII-XVIII; Galinsky (1969) 122-40; Dury-Moyaers (1981) 165-73.

(14) Alföldi (1965) 284; Galinsky (1969) 131; 139.

(15) Poucet (1979) 180sq.; Dury-Moyaers (1981) 172. 陶器は前525～470年に限られる (Galinsky (1969) 122sq.; 小川 (1994年) 419頁)。ウェイイの二つの神域 (ポルトナッチオとカンペッティ) で出土したテラコッタの小像は、以前はウェイイがまだ独立していた前5世紀の中期ないしは初期に置かれていたが (Galinsky (1969) 133sq. et n. 76; 小川、前掲箇所、は前6世紀末から前5世紀初めに置く)、恐らくローマ時代 (前4世紀ないしは3世紀) のものと考えの方がよい (Perret (1971) 41sq.; Poucet (1979) 179; Castagnoli (1982) 5)。理由は単純で、エトルーリア南部とラティウムでテラコッタ製の小さな奉納像が現れるのは前4世紀の初頭だからである (Torelli (1984) 227sq.)。Torelli は、この小像を、前388年に作られた4トリブスに編入されたローマの入植者が奉納したもので、ガリア人によるローマ占拠のあと、ローマをウェイイに移すための宣伝に使われた、と解釈する。興味深い仮説だが、想像力が勝ちすぎている印象を与える。

(16) アエネーアスのローマ、ラテン世界への伝播に関する研究は枚挙にいとまがない。さしあたり、小川 (1994年) 411～41頁を参照のこと。小川氏は、アエネーアス伝説はエトルーリアを介してローマに伝わったとする Bömer 説を支持し、前5世紀の初頭のローマはエトルーリアと敵対関係にあったので、エトルーリアの英雄であるアエネーアスに良い感情を持っていなかったが、前4世紀の末になると、マグナ・グラエキアに対してギリシア世界との緊密な結びつきを示す手段として、彼らはアエネーアスを祖とする伝説を復活させたとする Galinsky 説を斥けている。Dury-Moyaers (1981) 171-9によると、アエネーアス伝説は前6世紀にギリシア商人によってラティウムにもたらされた。Castagnoli (1982) 1-15 は、アエネーアス伝説がギリシア世界から直接ラーウィーニウムにもたらされたことを、より精緻に論じている。どちらも、結論部分は状況証拠に頼るにすぎないが、非常に興味深い主張である。

(17) Alföldi (1965) 126; CAH VII, 2, 58 (A. Momigliano); Gruen (1992) 32 et n. 116.

Alföldi はアルバの王のリストを作成したのはファビウス・ピクトル自身だと考

えるが、Gruen は、リスト自体はファビウス・ピクトルが歴史を書いたとき既に存在していたと考える。プルータルコス (Rom. 3, 1sq.) が、ファビウス・ピクトルはおおよそペパレートスのディオクレースに従っている、と前置きした上で、「アイネイアースから出たアルバの王が幾人か続いた後」と話を進めていることを見ると、アルバの王のリストはファビウス・ピクトル以前から存在したと考えた方がよいかもかもしれない。

(18) ただシケリアの Alkimos (RE I, 2, 1543sq. Nr. 18) はアルバをアエネアースの孫で、ローマを建設したロディウスの母としており (Fest. 326L)、アルバに関する何らかの情報を得ていたと考えられる。Alföldi は逆に、豚とアルバ・ロンガの結びつきをオリジナルなものとする (註(6)を参照)。de Sanctis (1956) 199 は、ローマではアルバ起源を主張するパトリキが勢力を持っていたことに、アエネアース伝説とアルバの伝説が結びつけられた理由を求めている。

(19) Ehlers (1949) 169 はその理由を、実際のモニュメント (青銅の豚の像と塩水に保管された豚) はラーウィーニウムにあったので、伝説をこの都市から切り離すことが出来なかったからだと考える。

カッシウス・ヘミナは次のような話を伝えている (fr. 11P)。レムスとロームルスが支配に関して自分たちの間で合意するよう、牧人たちは異議なく彼らに対等の権力を託した。予兆が起こった。つまり、豚が30匹の子を産んだのである。このため彼らは、ラレース・グルンディレース Lares Grundiles を祀る神域を作った、と (cf. Nonius Marcellus p. 164L)。Schilling (1979) は、Grundiles (Grundules) を grundire (ブーブー鳴く) の派生語と捉えた上で (p. 403)、ラーウィーニウムの建国伝説に現れる豚がラーウィーニウムでは民間信仰の対象となり (cf. Varro, rust. II, 4, 18)、ラレースに備わる保護者の役割を与えられていたが (p. 410)、ラーウィーニウムで行われていた民間信仰の意味に関してもはや正確には理解できなかったカッシウス・ヘミナは、ローマとラーウィーニウムに同じ祭儀と建国伝説が現れることを背景に、豚の予兆が起こった場所をローマに移した (p. 413)、と解釈する。興味深い仮説だが、私が当面の課題としている問題に対してはあまり役立たない。

補遺2 votivi anatomici*

身体の一部や内臓器官の模型（votivi anatomici、或いは ex voto anatomici と呼ばれるもので、以下 v.a.と略す）を神に奉納する習慣は、太古の昔から近代に至るまで多くの民族・宗教に認められ、ギリシア世界では特に前5世紀の末以降、アスクレピオスなど病の治癒に霊験のある神々の神域でしばしば奉納された(1)。イタリア半島では、中部ティレニア海側地域（南エトルーリア・ラティウム・カンパーニア北部）の神域からは、テラコッタ製の v.a.が多数出土している(2)。南エトルーリア・ラティウム・カンパーニア北部地域の神域は、v.a.以外にも出土した奉納品の種目とその組み合わせに明確な共通性が認められるので、この地域の人々は少なくとも Votive Religion のレベルでは同じ宗教意識を共有していたと想像しうる。この点ではローマも例外ではなかった(3)。この地域を特徴づける奉納品群が現れるのは前4世紀のことで、v.a.の奉納もこの頃に始まった(4)。前4世紀以降の中部イタリアでは、病気や肉体の危機への不安と、それらを癒し遠ざける神の威力にすがろうとする気持ちが病的なまでに人々の心を支配していたらしく、v.a.や乳幼児の像が神学上医療や出産・育児を司ると信じられていた神々の神殿に限らずほとんどすべての神域で奉納されるようになり、この地域の神殿は一種の病院となってしまった、と表現する研究者もいるくらいである(5)。

身体の一部を模して奉納することの意味は何か(6)。明らかに一部で全体を代表させるのが目的ではない。こうした解釈では臀部や膀胱が奉納された理由の説明がつかないし、v.a.の中には明瞭に病理的な症状を示すものが存在するからである。v.a.は、その部位の病気と関係して奉納されたと考えるのが適当だろう(7)。一見したところ健康そうなものも多数あるが、これは病気によっては症状を造形的に表現するのが不可能なこと、そしてなによりも素材がテラコッタの場合、同じモデルが幾つもの病気に使われることを念頭に置いて製造されたことから説明がつく。これらは押し型を用いた大量生産の品で、神域付近の店で参詣者を相手に売られていた。

四肢や内臓の奉納は狭義の病気としか結びつかないが、男性生殖器や子宮の場合は子を得ることへの願望、或いは出産の喜びも奉納の動機に数えることが

できよう。事実これらの器官とともに産着にくるまれた乳児の小像が出土する神域もあり、子宝を願う人々、無事の出産を感謝する人々がここを訪れたと知れる(8)。

以上は南エトルーリア・ラティウム・カンパーニア北部地域をイタリア半島の他の地域と比べた場合に言える特徴だが、南エトルーリア・ラティウム・カンパーニア北部地域でも、個々の神域を見ると必ずしも一様でないことが分かる。ラーウィーニウムの南の神域と東の神域がその良い例である。

南の神域で出土した v.a.の種類は以下の通り。下肢(207)、上肢(101)、男性生殖器(46)、女性生殖器(19 うち外生殖器は2。残りは内生殖器、特に子宮)、耳(10)、乳房(7)、男性のトルソ(3)、臀部(2)、膀胱?(1)、牛の舌?(3)。その他、復元が不可能で何を表すのか不明な断片が多数ある(9)。参考までに挙げた数字は、いずれも詳細な発掘報告書(10)が出た1975年当時のもで、この時点ですでに散逸していたものは含まれないし、その後の発見や復元による変動は当然ありうる。同じ地層から出土した他の遺物、例えば、類型と様式から年代の推定が可能な奉納者像をもとに、これらの v. a.は前4世紀から前2世紀最初の数十年の間に置かれている(11)。

南の神域の祭壇地域で出土した v.a.の中で下肢の占める割合が大きいのは、この種の奉納の一般的な傾向に合致する。これは足の病気が、貧しい人々(奉納者の多くがこうした人々だったと思われる)にとり生活に関わる切実な問題だったからかもしれない(12)。他方で、南の神域では生殖器の数が四肢に比べてはるかに少ない。それでも男性生殖器の数は子宮に比べればかなり多いが、そこには明らかに子供のものや、包茎の症状を示すものが含まれる。包茎の生殖器は他の神域からも出土しており、衛生状態の悪い場合によく見られる現象でそれ自体必ずしも異常とは言えないのかもしれないが、明確にその特徴を捉えたものはやはり病理的な症状を意図的に描いたと解してよからう(13)。これらの状況は、産着にくるまれた乳児が一例も出土していないことと相まって、この神域を訪れた人々は、懐妊や無事な出産、或いは子供の健やかな生長を願うためよりも、病の治癒と健康の回復を求めたことを窺わせる。南の神域には複数の神々が祀られていたが、そのうちディオスクーロイ、ケレース、ウェス

ペルナは碑文によって確かめられている。更に霊廟では、インディゲスと呼ばれる神が祀られていたらしい。このうち少なくともディオスクーロイは、困難に陥った時に人々が救いを求める神であり、泉の信仰と結びついて医神としての性格も併せ持っている(14)。

本稿の第3章、第4章で見たように、南の神域は、ローマの政務官が祭儀を行う場であり、ラテン人が集まって共同で祭儀を行う場でもあった可能性が高い。そうした政治的な性格を持っていた神域に、前4世紀以降、病に悩む人々が神の霊験を願って訪れるようになったことは興味深い。他方で、東の神域からも多数の奉納品が出土しており、この神域でも個人の祈願が盛んに行われたことを窺わせる。しかし奉納品の内容は南の神域から出土したものと大きく異なり(15)、ここでは成人式を前にした少年少女(16)や、妊娠・出産・育児・結婚に関する願いを持つ者が訪れたらしい。前4世紀以降、南エトルーリア・ラティウム・カンパーニア北部地域では、神学上医療や出産・育児を司ると信じられていた神々の神殿に限らずほとんどすべての神域で奉納されるようになったと言われる。だがラーウィーニウムを訪れた人は、自分の願いの種類に応じて神域を選んでいたようで、この意味からも、ラテン人の宗教意識に関してラーウィーニウムの神域は重要な情報を与えてくれるのである。

補遺2 votivi anatomici

*補遺2は、毛利(1998a)の内容の一部を要約したものである。

(1) Fenelli (1975) 207 n. 7; Comella (1981) 775; Pazzini (1935) 48sqq.

(2) 北イタリアから中部イタリアのアドリア海側にかけての地域および南イタリア・シチリア島から出土した奉納品群には、v.a.はあまり含まれない。多分これらの地方では、祭儀が病の治癒や生殖と結びつくことが少なかったのだろう。

(3) Fenelli (1975) 231-45; Comella (1981) 717-803; Somella (1971) 279 n. 23.

(4) Comella (1981) 717-803. v.a.はウェイイでも出土しているが、ここからはルケリア(Luceria)の頭部像(前323年以降と年代を推定されている)と類似したタイプの奉納頭部像が出土しており、ローマによる破壊(伝承によると前396年)後もカンペッティ(Campetti)の神域を訪れる者は跡を絶たなかったことを窺わせるので、v. a.の出現を前4世紀に置く説と矛盾はしない。cf. Maule-Smith (1959) 63.

- (5) Maule-Smith (1959) 63. ラティウムとその周辺で出土する v.a. は規模と程度においてギリシアの事例を遥かに凌駕しており、この地の人々に特有な宗教意識を反映する現象とすることができる。cf. Maule-Smith (1959) 61sq. et 90 n. 16.
- (6) Comella (1981) 762sq. Pazzini (1935) 42-79 は、v.a. の起源を未開の人々に広く見られる「病は罪に対する神の怒りの現れ」という考えと「代用」および「罪の転化」の観念との結合に求めている。だが前4、3世紀のラティウムに住む人々が、いまだ「罪の償いのため」や「神のものを神に返すため」という意識だけで v.a. を奉納していたかと言うと、これは疑わしい。彼らの間では v.a. の奉納は、願が成就して病が治癒したことを感謝し、神の靈験を証言してその恩に報いる行為という意味あいも含まれていたであろう。少なくとも帝政期イタリアの碑文は、病の治癒に感謝しての奉納であることを証言している。cf. CIL XI, 1295 (ager Placentinus); IGR I, 39 (Roma).
- (7) Fenelli (1975) 210sq. et n. 16.
- (8) Comella (1981) 762.
- (9) 開かれた皮膚の下から内臓を示す腹の模型は、ラーウィーニウムからは見つかっていない。cf. Fenelli (1975) 207.
- (10) Lavinium II, 253-303.
- (11) Fenelli (1975) 206-52; Lavinium II, 253-303.
- (12) Comella (1981) 762.
- (13) Fenelli (1975) 217.
- (14) R. Schilling (1960) 185 et n.4 によると、ディオスクーロイは、ギリシアでは病に苦しむ人々を救う神と信じられ、この信仰はローマでも知られていた。cf. Scholia ad Persium, II, 56. p. 20 (Buecheler).
- (15) 東の神域は v.a. の出土例が極めて少ない。1981年の時点で発見・識別されたのは、足、脚、子宮、乳房などで、男性生殖器は1例にとどまる。それに対し際だって多いのがテラコッタの立像。その数は70体から100体にも及ぶ。そのうち実寸より大きい4体は、アエギスからミネルワ（アテーナー）像と知れる。残りは少年少女の像で、多くは実寸より少し小さい。女神像のうち古い2体は前5世紀のもの。少年・少女像は、前5世紀の前半に遡る2体を除き、すべて前5世紀の末から前4世紀の末の間に製造された。テラコッタのミニチュアも出土しており、夫婦の座像や乳児を抱く女性の座像、男女対の立像、産着にくるまれた乳児などである。Enea nel Lazio, 187-213; Dury-Moyaers

(1981) 153-8; Torelli (1984) 8-10. 青銅製の小像も出土しているが、ラティウム
の他の神域と同様に、その数は少ない。

(16) Torelli (1984) 19-74. これらのテラコッタ像は、成人になろうとする若者が、
子供の状態を脱したこと、或いは結婚が可能なまでに成熟したことを象徴する
品（ザクロ、こま、ボール、兎など）を女神に奉納する姿を写すと解釈しうる。
加えて Torelli (1984) 23-50 は、少女像の多くが *seni crines* と呼ばれる結婚の時の
髪型をしていると指摘する。

参考文献

- Alföldi, A. (1965): *Early Rome and the Latins*. Ann Arbor.
- Altheim, Fr. (1930): *Griechische Götter im alten Rom*. Gießen.
- Andrén, A. (1960): *Dionysius of Halicarnassus on Roman Monuments*. in: *Hommages à Leon Herrmann, Bruxelles*, 88-104.
- Beloch, K. J. (1883): *Die Weihinschrift des Dianahaines im Aricia*. in: *Neue Jahrbücher für Philologie* 127, 169-75. (non vidi)
- Beloch, K. J. (1926): *Römische Geschichte bis zum Beginn der punischen Kriege*. Berlin.
- Bloch, R. (1954): *Une lex sacra de Lavinium et les origines de la triade agraire de l' Aventin et les origines de la triade agraire de l' Aventin*. in: *CRAI*, 203-212.
- Bloch, R. (1971): *À propos des inscriptions latines les plus anciennes*. in: *Acta of the Fifth International Congress of Greek and Latin Epigraphy Cambridge 1967*. Oxford, 175-181.
- Bömer, Fr. (1951): *Rom und Troia. Untersuchungen zur Frühgeschichte Roms*. Baden-Baden.
- Bömer, Fr. (1958): *P.Ovidius Naso, Die Fasten*. Bd.II Heidelberg.
- Boyancé, P. (1952): *Les Pénates et l' ancienne religion romaine*. in: *REA* 54, 109-15.
- Brodersen, K. (1994): *Pomponius Mela, Kreuzfahrt durch die alte Welt*. Darmstadt
- Carcopino, J. (1919): *Virgile et les origines d'Ostie*. Rome.
- Castagnoli, F. (1959): *Dedica arcaica Laviniate a Castore e Polluce*. in: *Studi e materiali di storia delle religioni* 30, 109-17.
- Castagnoli, F. (1959/60): *Sulla tipologia degli altari di Lavinio*. in: *Bullettino della Commissione Archeologica Comunale di Roma* 77, 145-72.
- Castagnoli, F. (1967): *I luoghi connessi con l' arrivo di Enea nel Lazio*. in: *Archeologia Classica* 19, 235-47.
- Castagnoli, F. (1977A): *Les sanctuaires du Latium archaïque*. in: *Comptes Rendus de l' Académie des Inscriptions et Belles Lettres*, 460-76.
- Castagnoli, F. (1977B): *Roma arcaica e i recenti scavi di Lavinio*. in: *La Parola del Passato* 32, 340-55.
- Castagnoli, F. (1982): *La leggenda di Enea nel Lazio*. in: *Studi Romani*, 30, 1-15.
- Comella, A. (1981): *Tipologia e diffusione dei complessi votivi in Italia in epoca medio-*

- e tardo-repubblicana. in: *Mélanges de l'École française de Rome (A)* 93, 717-803.
- Cornell, T. J. (1995): *The Beginnings of Rome. Italy and Rome from the Bronze Age to the Punic Wars (c. 1000-264 BC)*, London / New York.
- Crawford, M. (1971): A Roman Representation of the κέραμος τρωικός. in: *JRS* 61, 153-4.
- Crawford, M. (1983): *Roman Republican Coinage*, vol. I (1st ed. with corrections), Cambridge.
- Dahmann, H., Pomponius Mela. in: *RE XXI*, 2360-2412.
- de Sanctis, G. (1956): *Storia dei Romani*, I (2a ed.), Firenze.
- de Sanctis, G. (1953): *Storia dei Romani IV*, II, 1, Firenze.
- Devoto, G. (1928): in: *St. Etr.* 2, 323sq. (non vidi)
- Dury-Moyaers, G. (1981): *Énée et Lavinium. A propos des découvertes archéologiques récentes*, Bruxelles.
- Ehlers, W. (1949): *Die Gründungsprodigien von Lavinium und Alba Longa*. in: *Mus. Helv.* 6, 166-75.
- Fenelli, M. (1975): *Contributi per lo studio del votivo anatomico. I votivi anatomici di Lavinio*. in: *Archeologia Classica* 27, 206-52.
- Fenelli, M., Guaitoli, M. (1990): *Nuovi dati degli scavi di Lavinium*. in: *Archeologia Laziale* 10, 2, 182-93.
- Fraser, P. M. (1972): *Ptolemaic Alexandria*. 3 Vols. Oxford.
- Friggeri, R. (2001): *La collezione epigrafica del Museo Nazionale Romano alle Terme di Diocleziano*. Milano.
- Galinsky, G. K. (1969): *Aeneas, Sicily and Rome*. Princeton.
- Gantz, T. N. (1974): *LAPIS NIGER: THE TOMB OF ROMULUS*. in: *P.P.* 29, 350-61.
- Gruen, E. S. (1992): *Culture and National Identity in Republican Rome*. New York.
- Guarducci, M. (1946/48): *Tre cippi latini arcaici con iscrizione votive*. In: *BCAR* 72, 3-10.
- Guarducci, M. (1951): *Legge sacra da un antico santuario di Lavinio*. in: *Archeologia Classica* 3, 99-103.
- Guarducci, M. (1956/58): *Cippo latino arcaico con dedica ad Enea*. in: *BCAR* 76, 3-13.
- Guarducci, M. (1959): *Ancora sulla legge sacra di Lavinio*. in: *Archeologia Classica*, 11, 204-210.

- Guarducci, M. (1966): *Ianus Geminus*. in: *Mélanges A. Piganiol*, t. 3, Paris, 1607-21.
- Guarducci, M. (1971): *Enea e Vesta*. in: *Röm.Mitt.* 78, 73-89.
- Guarducci, M. (1976): *Nuove osservazioni sulla lamina bronzea di Cerere a Lavinio*. in: *Mélanges à J. Heurgon*, t. 1, Rome, 411-425.
- Giuliani C. F., Sommella, P. (1977): *Lavinium. Compendio dei documenti archeologici*. in: *La Parola del Passato* 32, 356-72
- Holloway, R. R.(1994): *The Archaeology of Early Rome and Latium*, London / New York.
- Kolbe, H.-G. (1970): *Lare Aineia?* in: *Röm.Mitt.* 77, 1-9.
- Latte, K. (1960): *Römische Religionsgeschichte*. München.
- Le Bonniec, H. (1958): *Le culte de Cèrés à Rome. Des origines à la fin de la République*. Paris.
- Leumann, M. (1977): *Lateinische Laut- und Formenlehre*, München (Neuausgabe der 1926-1928 in 5. Auflage erschienenen "Lateinischen Laut- und Formenlehre")
- Liou-Gille, B. (1980): *Cultes << Héroïques >> romains. Les fondateurs*. Paris.
- Lloyd, R. B. (1956): *Penatibus et Magnis Dis*. in: *AJP* 77, 38-46.
- Masquelier, N. (1966): *Pénates et Dioscures*. in: *Latomus*, 25, 88-98.
- Maule, Q.F. and Smith, H.R.W. (1959): *Votive Religion at Caere: Prolegomena*. Berkeley-Los Angeles.
- Mooney, G.W. (1921): *The Alexandra of Lycophron with English Translation and Explanatory Notes*. London.
- Nilsson, M.P. (1967): *Geschichte der griechischen Religion*. 1.Bd. 3.Aufl. München.
- Nilsson, M.P. (1974): *Geschichte der griechischen Religion*. 2.Bd. 3.Aufl. München.
- Ogilvie, R. M. (1965): *A Commentary on Livy. Books 1-5*. Oxford.
- Ogilvie, R. M. (1969): *Some Cults of Early Rome*. in: *Hommages à Renard*, t. 2, Bruxelles, 566-72.
- Palmer, R.E.A.(1974): *The Gods of the Grove Albunea*. in: *Roman Religion and Roman Empire*, Philadelphia, 79-171; 244-66.
- Pazzini, A. (1935): *Il significato degli ex voto ed il concetto della divinità guaritrice*. in: *RAL* s. 6, 11 (1935) 42-79.
- Peruzzi, E. (1959): *Un problema etimologico latino*. in: *Maia* 11, 212-223.
- Peyré, Chr. (1962): *Castor et Pollux et les Pénates pendant la période républicaine*. *MEFR* 74, 433-462.

- Poucet, J. (1979): Le Latium protohistorique et archaïque à la lumière des découvertes archéologiques récentes. in: *L' Antiquité Classique* 48 (1979) 177-220.
- Pugliese Carratelli, G. (1962): Achei nell' Etruria e nel Lazio? in: *La Parola del Passato* 17, 5-25.
- Pugliese Carratelli, G.(1968): Lazio, Roma e Magna Grecia prima del secolo quarto A. C. in: *La Parola del Passato* 23, 321-47 = *La Magna Grecia e Roma nell' età arcaica*, Napoli 1069, 49-81.
- Radke, G. (1964): Zu der archaischen Inschrift von Madonnetta. in *Glotta* 42, 214-9.
- Radke, G.(1979): *Die Götter Altitaliens*. 2.Aufl. Münster.
- Salmon, E. T. (1982): *The Making of Roman Italy*. London.
- Schaenburg, K. (1960): Äneas und Rom. in: *Gymnasium* 67, 176-191 et Tafeln VII-XVIII.
- Schilling, R. (1960): Les Castores romains à la lumière des traditions indo-européennes. in: *Hommages à Dumézil*, Bruxelles, 177-92.
- Schilling, R. (1972): La situation des études relatives à la religion romaine de la République. in: *ANRW I*, 2, 317-347.
- Schilling, R. (1979): Les << LARES GRVNDILIBUS >>. in: *Rites, Cultes, dieux de Rome*, Paris, 401-14 = *Mélanges offerts à J. Heurgon*, Paris 1976, 947-60.
- Sommella, P.(1969): Lavinium. Rinvenimenti preistorici e protoistorici. in: *Archeologia Classica* 21, 18-33.
- Sommella, P.(1971/72): Heroon di Enea a Lavinium. Recenti scavi a Pratica di Mare. *Rendiconti Atti della Pontificia Accademia Romana di Archeologia (Serie III)* 44, 47-74.
- Sommella, P.(1973/4): La necropoli protostorica invenuta a Pratica di Mare. in: *Atti della Pontificia Accademia Romana di Archeologia. Rendiconti* 46, 33-48.
- Sommella, P.(1974): Das Heroon des Aeneas und die Topographie des antiken Lavinium. *Gymnasium* 81, 273-97.
- Sordi, M. (1960): *I rapporti romano-ceriti e l'origine della civitas sine suffragio*. Roma.
- Stolz, F. Debrunner, A., Schmid, W. P. (1966): *Geschichte der lateinischen Sprache*. 4.Aufl. Berlin.
- Taylor, L. R. (1960): *The Voting Districts of the Roman Republic*. Rome.
- Thomasson, B. M.(1961): *Deposito Votivo dell' antica città di Lavinio (Pratica di Mare)*.

- in: *Opuscula Romana* III (Institutum Romanum Regni Sueciae) 123-38.
- Tilly, B. (1936): The Identification of the Numicus. in: *JRS* 26, 1-11.
- Torelli, M.(1984): *Lavinio e Roma. Riti iniziatici e matrimonio tra archeologia e storia.* Roma.
- Torelli, M. (1999): *TOTA ITALIA. Essays in the Cultural Formation of Roman Italy.* Oxford.
- Wagenvoort, H. (1961): *De lege sacra Lavinia nuper reperta.* in: *Mnemosyne* s. 4, vol. 14, 217-223.
- Wagenvoort, H. (1972): *Wesenzüge altrömischer Religion.* in: *ANRW* I, 2, 348-376.
- Weinstock, St. (1952): *A lex sacra from Lavinium.* in: *JRS* 42, 34-36.
- Weinstock, St.(1960): *Two Archaic Inscriptions from Latium.* in: *JRS* 50, 112-18.
- Wissowa, G. (1912): *Religion und Kultus der Römer.* 2. Aufl. München.
- CAH VII, 2: *The Cambridge Ancient History. 2 ed. Vol.VII Part 2: The Rise of Rome to 220 B.C.* Cambridge 1986.
- CRR: Sydenham, E. A., *The Coinage of the Roman Republic,* London 1952.
- Enea nel Lazio: Enea nel Lazio, Archeologia e Mito (Catalogo della Mostra, Campidoglio, Palazzo dei Conservatori),* Roma 1980.
- Ernout-Meillet: Ernout, A. et Meillet, A., *Dictionnaire étymologique de la langue latine,* 4^{me} éd., Paris 1979.
- FGrHist (Text): Jacoby, F.: *Die Fragmente der griechischen Historiker. 3. Teil b Kommentar zu Nr. 297-607 (Text).* Leiden 1955.
- FGrHist (Noten): Jacoby, F.: *Die Fragmente der griechischen Historiker. 3. Teil b Kommentar zu Nr. 297-607 (Noten).* Leiden 1955.
- Lavinium I: Castagnoli, F.(ed.): Lavinium I: Topografia generale, fonti e storia delle ricerche,* Roma 1972.
- Lavinium II: Castagnoli, F. et al. (ed.): Lavinium II: Le tredici are,* Roma 1959.
- Magna Grecia: La Magna Grecia e Roma nell' età arcaica. Atti dell' ottavo convegno di studi sulla Magna Grecia,* Napoli 1969.
- Peter: Peter, H.: *Historicorum romanorum reliquiae. vol. 1 (2 ed.).* Stuttgart 1914.
- RE: *Paulys Realencyclopädie der classischen Altertumswissenschaft.*
- OCD: *Oxford Classical Dictionary. 3er ed.*

小川正廣（1994年）：『ウェルギリウス研究 ―ローマ詩人の創造―』（京都大学学術出版会）

毛利 晶（1990）：「「ベルヴェデーレの祭壇」に関する覚え書き」 『西洋史学』（第155号）36～48頁

毛利 晶（1998a）：「多神教と個人救済 ―ローマ共和政期の宗教事情―」 『岩波講座世界歴史4 地中海世界と古代文明』（岩波書店）251～72頁

毛利 晶（1998b）：「ラウニウムとローマ共和政期の宗教」 『西洋史研究』（新輯第27号）179～92頁